

# 筑後国三潯郡衙跡Ⅵ

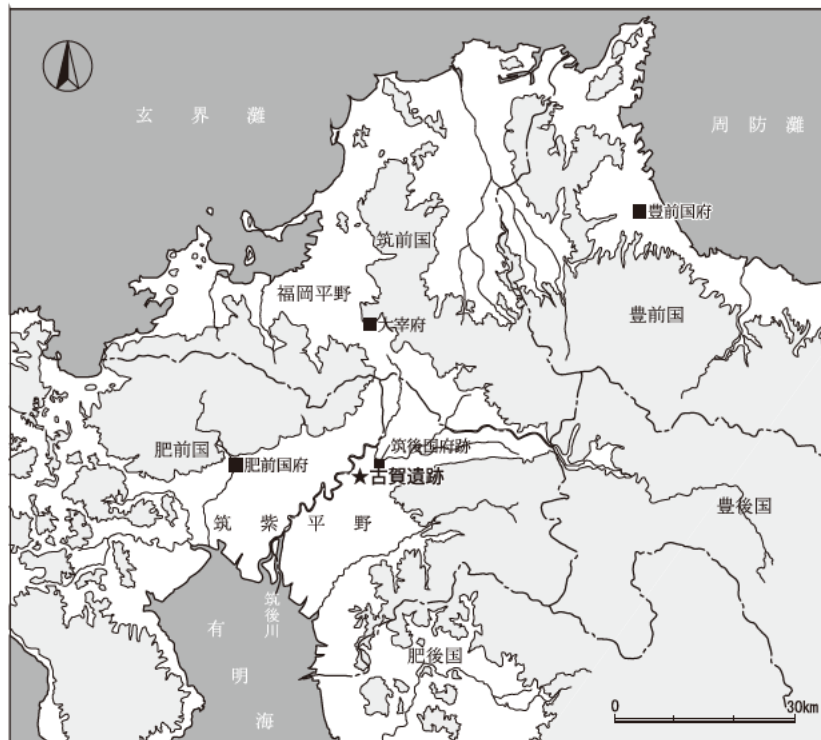
古賀遺跡 第1・2次調査

平成23年(2011)3月  
久留米市教育委員会



# 筑後国三潯郡衙跡Ⅵ

古賀遺跡 第1・2次調査



平成23年(2011)3月  
久留米市教育委員会



## 序

豊かな水と緑に囲まれた久留米市は、古来より生活環境に恵まれ、先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

特に、律令期の奈良・平安時代には古代国家における地方行政の中枢機関である筑後国府や、古代寺院である国分寺・国分尼寺が置かれるなど、行政・文化・経済・交通の要衝として栄えたところであります。

本遺跡が所在する大善寺町一帯は、『日本書紀』景行天皇条や雄略天皇条にその名が見える古代豪族『水沼(間)君』の本拠地であり、律令体制下では、筑後国三潞郡の中心地として栄えたものと考えられます。

平成20年度に発掘調査を開始しました古賀遺跡は、炭化米の出土が伝えられ、かつ、『絹本着色玉垂宮縁起』等にみられる「古賀軍司長者」に関係することが知られており、その位置や状況から、かつて郡衙推定地とされていた場所です。

今回ご報告申し上げます古賀遺跡につきましては、第1次調査を重要遺跡確認調査として、第2次調査を専用住宅建設に伴い発掘調査しており、その報告を本書に掲載いたしております。

以上のような発掘調査成果を掲載した本書が、今後の官衙研究及び埋蔵文化財保護の理解と普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解を頂きました地権者の■■■■氏、久留米市都市建設部をはじめとする関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月31日

久留米市教育委員会  
教育長 堤 正 則



# 例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国・県費の補助を受けて、平成20年度に実施した古賀遺跡第1・2次調査の概要である。

古賀遺跡第1次調査…略称[KOG-1]、調査番号[200823]

古賀遺跡第2次調査…略称[KOG-2]、調査番号[200827]

2. 発掘調査は久留米市教育委員会の委嘱を受け、久留米市文化観光部文化財保護課の小澤太郎が担当した。

3. 遺構の測量は、トータルステーションを用いて3次元計測し、調査担当者と臨時職員の森啓恵・塚本明美がこの作業にあたった。個別の遺構実測図・土層図等は小澤が作成した。また取得した測量データ、及びスキニングした個別実測データはCUBIC社製ソフト「遺構くんCubic」にて編集し、デジタルトレースした。なお、古賀和子が行った一部の甕棺底部の実測を除く全ての遺物の実測・拓本・製図は小澤が行った。製図は遺構と同様の手順で行いeps出力したものをillustratorデータ形式に変換して使用している。

4. 本書に掲載された空中写真を除く遺構写真、遺物写真は小澤が撮影した。

5. 本書に記した方位はすべて座標北を示す。また基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系2000）による。

6. 調査に際し、文化庁及び筑後国府跡発掘調査指導委員会の指導・助言をいただいた。

山下信一郎（文化庁調査官）・渡辺正気（元九州考古学会会長）・小田富士雄（福岡大学名誉教授）・西谷 正（九州大学名誉教授）・佐田 茂（佐賀大学名誉教授）・長 洋一（元西南学院大学教授）・田中正日子（元第一経済大学教授）・坂上康俊（九州大学大学院教授）・新原正典（福岡県教育庁）・小池史哲（福岡県教育庁）・岸本 圭（福岡県教育庁）

7. 本書に使用した遺構略号は下記の内容を示す。

SDー溝 SIー竪穴住居 SKー土坑 SPーピット STー墳墓（甕棺墓・土壙墓） SXー不明遺構

8. 遺物登録番号は〔調査番号(6桁)+遺物番号(6桁)〕の組み合わせだが、遺物実測図中では調査番号を省略し、カッコ内に遺物番号のみ記した。 例〔200823ー000001〕→(000001)

9. 調査に関わる遺物、及び記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。

10. 本書の執筆・編集は、小澤が担当した。

---

## 本文目次

|                |    |
|----------------|----|
| I. 緒 言         |    |
| 1) 調査に至る経過     | 1  |
| 2) 調査の概要       | 1  |
| 3) 調査の体制       | 2  |
| II. 遺跡の位置と環境   | 5  |
| 1) 遺跡の立地と自然環境  | 5  |
| 2) 周辺の遺跡と在地の動向 | 5  |
| III. 第1次調査     | 9  |
| 1) 調査の目的と経過    | 9  |
| 2) 調査の概要       | 9  |
| 3) 検出遺構        | 10 |
| 4) 出土遺物        | 14 |
| IV. 第2次調査      | 17 |
| 1) 調査に至る経過     | 17 |
| 2) 調査の概要       | 17 |
| 3) 検出遺構        | 18 |
| 4) 出土遺物        | 19 |
| V. 結語          | 23 |
| 報告書抄録          | 巻末 |

---

## 挿図目次

|                                                  |      |
|--------------------------------------------------|------|
| 図1 古賀遺跡の発掘調査地点 (1/2, 500)                        | 3    |
| 図2 周辺の遺跡分布状況 (1/25, 000)                         | 4    |
| 図3 第1次調査区平面図 (1/100)                             | 折り込み |
| 図4 S T 10・70・80平面・断面見通し図 (1/20)                  | 11   |
| 図5 S T 20・30平面・断面見通し図 (1/20)                     | 12   |
| 図6 S I 100平面・断面見通し図 (1/40)                       | 13   |
| 図7 S K 60平面・断面見通し図 (1/20)                        | 13   |
| 図8 S D 40・50断面図 (1/40)                           | 14   |
| 図9 S T 10・70・80出土遺物実測図 (1/4・1/8)                 | 15   |
| 図10 S T 20・S D 40・S K 60・S T 90・ピット出土遺物実測図 (1/4) | 16   |
| 図11 第2次調査区平面図 (1/50)                             | 18   |
| 図12 S T 5平面・断面見通し図 (1/20)                        | 19   |
| 図13 S D 1土層断面図 (1/20)                            | 19   |
| 図14 S T 5下甕実測図 (1/8)                             | 20   |
| 図15 S D 1出土遺物実測図① (1/8)                          | 21   |
| 図16 S D 1出土遺物実測図② (1/4)                          | 22   |
| 図17 「絹本着色玉垂宮縁起」(左)と「御船山社官屋敷古図」(右)                | 22   |



---

## 写真図版目次

- 図版1 (1) 古賀遺跡遠景①(南上空から)  
(2) 古賀遺跡遠景②(南西上空から)
- 図版2 (1) 古賀遺跡遠景③(南東上空から)  
(2) 古賀遺跡遠景④(東上空から)
- 図版3 (1) 第1次調査区上空から広川方面を臨む(北東から)  
(2) 第1次調査区上空から大善寺玉垂宮方面を臨む(東上空から)
- 図版4 (1) 第1次調査区北半部(北上空から)  
(2) 第1次調査区南半部(東から)
- 図版5 (1) S T10検出状況(南東から)  
(2) S T10甕棺出土状況(北西から)  
(3) S T10完掘状況(南東から)
- 図版6 (1) S T70検出状況(南東から)  
(2) S T70甕棺出土状況(南東から)  
(3) S T70完掘状況(北西から)
- 図版7 (1) S T80甕棺出土状況(北から)  
(2) S T80完掘状況(北西から)  
(3) S T90完掘状況(南から)
- 図版8 (1) S T20完掘状況(北東から)  
(2) S T30完掘状況(南東から)  
(3) S K60遺物出土状況(北西から)
- 図版9 (1) S T10下甕  
(2) S T70下甕  
(3) S T20出土土器  
(4) S D40出土土器  
(5) S K60出土土器  
(6) ピット等出土土器
- 図版10 (1) 第2次調査区全景(北から)  
(2) S D1北半部上層遺物出土状況(北から)
- 図版11 (1) S D1北半部上層遺物出土状況(南から)  
(2) S D1南半部上層遺物出土状況(南から)  
(3) S D1土層堆積状況(北から)
- 図版12 (1) S D1完掘状況(南東から)  
(2) S T5甕棺出土状況(南東から)  
(3) S T5完掘状況(南東から)
- 図版13 (1) S T5下甕  
(2) S D1出土遺物①  
(3) S D1出土遺物②  
(4) S D1出土遺物③  
(5) S D1出土遺物④  
(6) S D1出土遺物⑤

---

# 1. 緒 言

## 1) 調査に至る経過

道蔵遺跡では、平成元年の調査開始以降13次にわたる調査で、8世紀後半～9世紀代にかけての計画的に配置された大形の掘立柱建物群や廃棄土坑、大形井戸などが検出されていた。出土品にも、転用硯や緑釉陶器、越州窯系青磁等の特殊な遺物や、郡名である「三万」「大領」「三万少」「三万領」「帳」といった三潞郡司の官職名を記した墨書土器などが見られる。これらの成果から、本遺跡が古代三潞郡における郡衙としての機能を担っていた可能性が高いものと思われた。しかし、いずれの調査も開発に伴い偶発的に記録保存したものである。

一方、安武町所在の野瀬塚遺跡でも、大形の建物群が計画的に配置された状況が確認され、転用硯や施釉陶器、「三万大領」「三万少」などの墨書土器を出土した。このような点から、本遺跡も古代三潞郡の郡衙関連遺跡と考えられる。かつ、道蔵遺跡と時期的にも併行することから、両者の関係が注目された。また、その重要性から平成2年には市指定史跡となったが、圃場整備終了後は、道蔵遺跡と同様に、周辺地域での発掘調査もほとんど進展がない。

古賀遺跡については、昭和20～30年代にかけて市営住宅が建設された際に炭化米や土器の出土を伝えていた。また「御船山社官屋敷古図」に「古賀軍司長者建立尊」と書き込まれていることは注目される。当地にも古賀の地名が残り、縁起に描かれた「玉垂宮」との位置関係をみると、書き込み個所が当地付近に該当するとされる。かつ「軍司」、すなわち郡の役人を指す「郡司」と同音であることから、関連施設が存在する可能性が考えられた。

文化財保護行政の立場から、以上の3遺跡をはじめとする古代三潞郡関連遺跡群の調査研究を進めることは、律令国家による地方支配の具体相を究明する上で極めて重要であろう。また、そこから得られた成果を市民に情報提供し、将来的には遺跡の保存と整備活用を進めたいと考える。そこで、上記遺跡の建物配置と変遷および、機能の解明、その範囲の確定を目指すこととし、平成14年度より「筑後国三潞郡衙跡」として確認調査を実施している。そのうち今回は、平成20年度に実施した古賀遺跡の2地点について報告する。

## 2) 調査の概要

**第1次調査** 古賀遺跡は、上津荒木川に南面した東西約250m、南北約120mの低台地上に展開するが、調査地点はその東端部に位置する。重要遺跡確認調査として実施した。調査面積は530㎡と広いが、遺構密度は低く出土遺物も少ない。弥生時代の甕棺墓や土壇墓、古墳時代以降の柱穴（竪穴住居の柱穴か）、中世の土坑や溝を確認した。

**第2次調査** 専用住宅建設の事前調査として、第1次調査地点の約25m南西で実施した。調査面積は32㎡と狭いが、甕棺墓1基と南北溝を検出した。同溝は奈良時代頃に比定される。



### 3) 調査の体制

平成20年度の古賀遺跡の発掘調査、同22年度の整理作業に係わる調査体制は、以下のとおりである。

〔発掘調査：平成20年度〕

|                |                      |                 |
|----------------|----------------------|-----------------|
| 調査主体：久留米市教育委員会 | 教育長                  | 石川集充            |
| 調査総括：久留米市文化観光部 | 部 長                  | 中園雄介            |
| 文化財保護課         | 課 長                  | 水落哲也            |
|                | 課長補佐兼主査              | 立石雅文            |
|                |                      | 山口 淳            |
|                |                      | 古賀正美            |
|                | 事務主査                 | 松村一良            |
|                |                      | 近澤康治（調査総括・事前審査） |
|                | 庶務担当                 | 本庄ともえ           |
|                | 調査担当                 | 小澤太郎            |
| 整理担当専任非常勤職員    |                      | 古賀和子            |
|                |                      | 豊田章子            |
| 発掘調査臨時職員       | 秋吉 力・勝田美代子・蒲池 稔・河野好子 |                 |
|                | 合戸喬一・塚本明美・津留崎利子・原口貞子 |                 |
|                | 森 啓恵                 |                 |
| 整理作業臨時職員       | 若林由美                 |                 |

〔整理報告：平成22年度〕

|                |                       |                 |
|----------------|-----------------------|-----------------|
| 調査主体：久留米市教育委員会 | 教育長                   | 堤 正則            |
| 調査総括：久留米市文化観光部 | 部 長                   | 辻 文孝            |
| 文化財保護課         | 課 長                   | 立石雅文            |
|                | 学芸主幹                  | 山口 淳            |
|                | 課長補佐兼主査               | 宮崎俊一            |
|                |                       | 古賀正美            |
|                | 主査                    | 白木 守            |
|                | 事務主査                  | 近澤康治（調査総括・事前審査） |
|                | 庶務担当                  | 本庄ともえ           |
|                | 調査担当                  | 小澤太郎            |
| 整理担当専任非常勤職員    |                       | 古賀和子            |
|                |                       | 豊田章子            |
| 整理作業臨時職員       | 赤司 潤・松本祥子・田中千佐子・山口久美子 |                 |

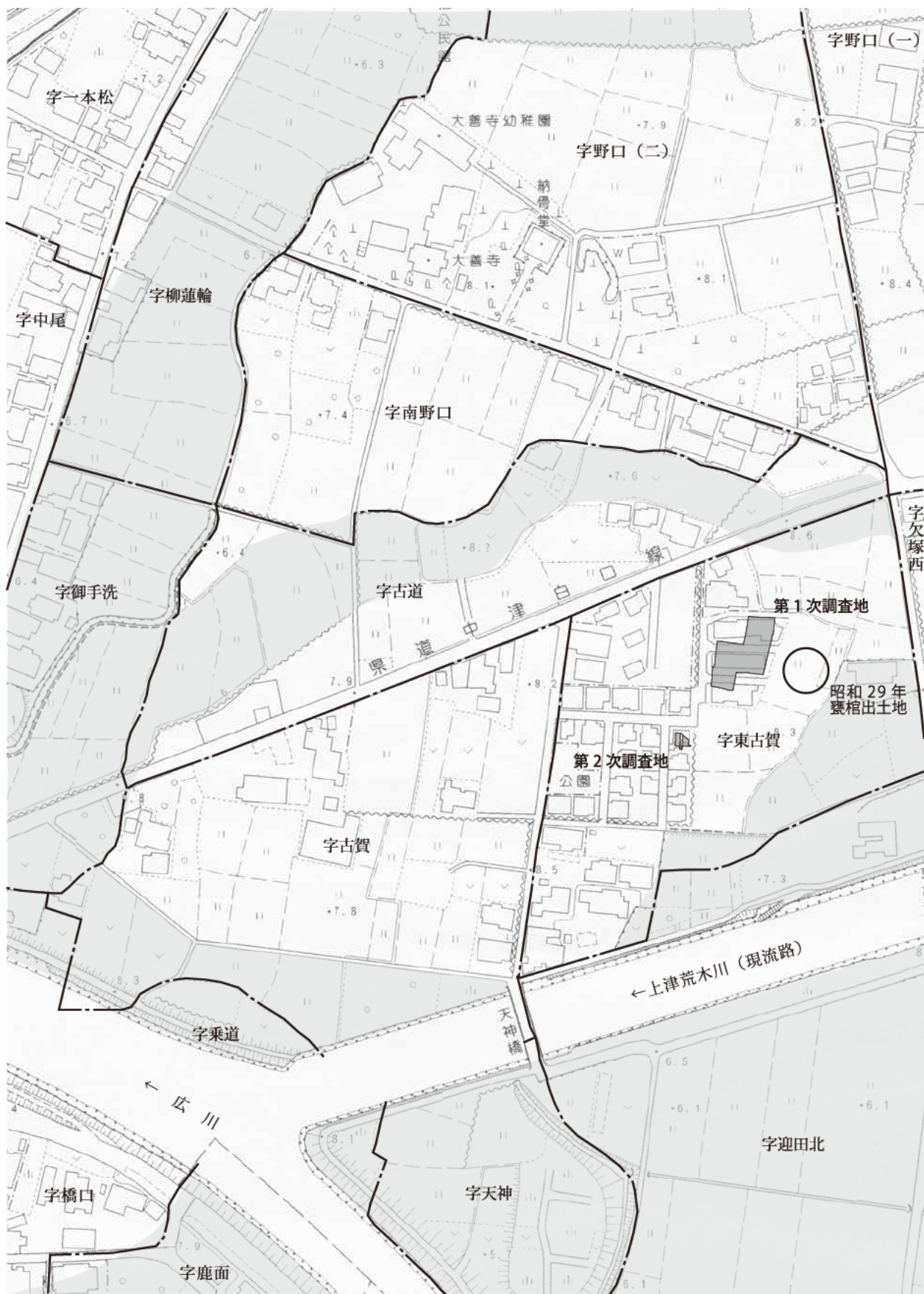


図1 古賀遺跡の調査地点と周辺地形 (1/2, 500)





- |                |           |           |          |                      |          |
|----------------|-----------|-----------|----------|----------------------|----------|
| 1. 道蔵遺跡        | 2. 野瀬塚遺跡  | 3. 蓮輪遺跡   | 4. 夫婦塚遺跡 | 5. 天神免遺跡             | 6. 御供田遺跡 |
| 7. 伽藍田遺跡       | 8. 汐入遺跡   | 9. 荊津氏館跡  | 10. 礎遺跡  | 11. 乙名塚 (伝筑後国守道君首名墓) |          |
| 12. 中寺遺跡       | 13. 大善寺遺跡 | 14. 一本松遺跡 | 15. 御塚古墳 | 16. 権現塚古墳            | 17. 東裏遺跡 |
| 18. 銚子塚古墳 (消滅) | 19. 塚畑遺跡  | 20. 念仏塚遺跡 | 21. 今泉遺跡 | 22. 坂本遺跡             | 23. 御廟塚  |
| 24. 折坂遺跡       | 25. 烏帽子塚  | 26. 旗原遺跡  | 27. 古賀遺跡 | ※ゴシック体は三潞郡衙関連遺跡      |          |

図2 周辺の遺跡分布状況地形 (1/25,000)



---

## II. 遺跡の位置と環境

### 1) 遺跡の立地と自然環境

阿蘇外輪山に源を発する九州最大の河川筑後川（全長143km）は、筑紫平野を西に流れ本市を通過する。ところが、本市篠山町の久留米城が立地する台地と佐賀県みやき町の千栗八幡宮が立地する丘陵先端部間は、筑紫平野の地峡となっており、ここで流路を南西方へ転じ、典型的な蛇行の姿を見せながら有明海へと注ぐ。

さて、古賀遺跡は久留米市街の南西約5km、標高8～9mの低台地上に立地する。本遺跡の南側は上津荒木川と接しており、南西側で広川と合流する。広川を約400m下れば右岸に大善寺玉垂宮があり、そこから約1km下ると右岸に道蔵遺跡がある。

近代以前の筑後川や広川は、当地方における重要な水上交通路であった。これは最大6mにも及ぶ有明海の激しい干満の差を利用したものである。満潮ともなると河川の淡水が川上へ逆流し（あお）、これに乗って有明海から筑後川を遡り、城島町下田で分岐して広川へ入った船は大善寺玉垂宮下まで航行できたという。西小路の西ノ浜には船着き場があったが、ここは深さ数mの入り江になっていて、地元では俗に「ガランドウ」と呼ばれていた。相当の大型の船も航行できたという（註1）。因みに「あお」は、現代の上津荒木川においても古賀遺跡の更に上流域まで到達する状況が確認できる。また、玉垂宮より下流の低湿地帯を臨む低台地先端部や谷地形の入り口付近には、「荊津（おどろつ）」（註2）「船津」「碇」などの小字名が残っており、そこがかつては河川交通における川港であった可能性を示していると思われる。

### 2) 周辺の遺跡と在地の動向

当地方の歴史は、人々と水との関わりによって形づくられてきたといっても過言ではない。「ミズマ」という地名も、その風土的特徴をよく表している。

**弥生時代** 当地域で人々の生活が明確になるのは、弥生時代前期末～中期初頭頃である。道蔵遺跡からは、円形プランの竪穴住居や土坑が検出されている。一方、御塚・権現塚古墳の西側に広がる汐入遺跡では、甕棺墓地が形成されている。

中期に突入すると、甕棺墓地は、集落の西・東側に広がる。西側では大正時代の耕地整理の際、多数の甕棺墓群が出土したという。また、今回の調査でも古賀遺跡で甕棺墓群が確認されており、広川水系の河川に面した低台地上に点在する様相が明らかになってきた。

後期から終末期になると、集落は俄然整備されてくる。まず、直径160m程の生活空間を二重の環溝によって人工的に取り囲む。また、その南側と北側は開析谷の斜面であり、自然地形も居住域を取りまく外帯施設として利用している。他にも多くの溝が走向しているが、断面は全て逆台形を呈している。これらは、土地が低いために排水機能を有していたものと思われる。生活諸施設のうち、

堅穴住居は主に環壕内に存在するが、掘立柱建物や井戸は、環壕外の空間に存在するものが多いようである。この時期の遺物として注目されるのが、韓式土器（軟質土器）片や、筑後川流域の集落から多く出土する透かしのある器台、溝内から出土した銅鏃・青銅製鉞、鉄製の鎌・方形刃先等の金属器などである。他にも甕棺墓とともに広形銅戈が出土しており（註3）、当集落が筑後川と有明海を媒介に、海外や周辺地域との交渉のみならず、拠点的な集落として政治的にも重要な位置を占めるまでに成長したことが伺われる。

因みに、この時期の広川沿岸には青銅製の祭器を埋納する遺跡が多く分布している。筑後川との合流地点で河口に近い本市三潯町の御廟塚からは銅剣2口、隣接する烏帽子塚からも銅剣2口が出土している。少し川を遡れば道蔵遺跡があり、さらに上流の荒木町鬼木遺跡からは広形銅矛が1口出土している。さらに上流では八女郡広川町藤田の天神浦遺跡から銅矛13口、隣接する田代遺跡から5口の計18口の銅矛が出土している。八女市吉田からも13口の銅矛が、広川町吉常八ノ久保遺跡から銅矛1口と銅戈1本が出土している。これらの遺跡は、約2～3km間隔で分布しており、青銅製武器型祭器では全国的にもトップクラスの集中度である。弥生時代後期における、広川とその流域の重要性が浮かびあがる。

**古墳時代** 『日本書紀』景行天皇四年条や雄略天皇十年条に登場する「水沼（間）君」の奥津城と考えられる広川右岸域には、国指定史跡「御塚・権現塚古墳」・銚子塚古墳などの首長墓をはじめ、「イロハ塚」とも称されるように多数の古墳が築造されていた。御塚古墳は、3重の周濠を巡らす全長78mの帆立貝型の古墳である。埋葬主体部は未調査のため不明だが、埴輪や須恵器・土師器・新羅土器等が出土し、5世紀後半の築造と考えられる。なお、墳頂部には石人の残欠があったといわれる（註4）。一方、権現塚古墳は、御塚古墳の北側に隣接する径50m大形円墳で二重の周濠を有する。御塚古墳同様、埋葬主体部は未調査のため不明だが、埴輪や須恵器・土師器・新羅土器等が出土している。築造時期は、御塚古墳に後出する6世紀前半と考えられている。以上2つの古墳は、時期的に相前後し南北に極めて隣接した配置で築造されている。視覚的障害物のない古代においては、一体に見える両古墳があたかも巨大な前方後円墳と見まがうばかりで、近隣に類を見ない土木構築物として威容を誇ったであろう。また、銚子塚古墳は二重周濠を有する前方後円墳とされるが、戦前に開墾を受け実態は不明である。6世紀後半になると首長層の墓域は東に移り、荒木町の二子塚古墳、鷲塚古墳が知られている。ともに全長50m程の前方後円墳である。しかし埴輪や須恵器の出土以外、詳細は不明である。また、汐入遺跡では、鉄鏃を副葬する土壙墓1基を検出している。古墳に葬られない階層の墓地を確認したことは、地域社会復元に貴重な資料を提供することになる。

一方、近年、生活諸施設が発見されつつあり、道蔵遺跡で検出された前期の堅穴住居・井戸をはじめ、御供田遺跡や蓮輪遺跡から後期の土坑、天神免遺跡からは後期の井戸、夫婦塚遺跡からも井戸などを発見した。また当該期の遺物は、遺構に伴わないものが多いものの、広範囲に渡って分布しているため、付近一帯に大規模な集落が存在した可能性も考えられる。

東方の二子塚古墳周辺でも、集落跡が検出されている。二子塚遺跡や白口経塚遺跡では、6世紀後半に築造された二子塚古墳をはじめ、古墳造営との関連が考えられる。また、対岸の旗原遺跡では6世紀後半～7世紀にかけての集落が調査されている。竪穴住居と掘立柱建物で構成され、住居2～3軒に1棟の割合で倉庫と考えられる総柱建物が確認されている。このように広川流域の旧三潞郡域での積極的な活動痕跡が確認されつつある。

**奈良～平安時代** 大善寺の地名は、明治21(1888)年の市町村制発布の翌年4月、宮本・夜明・藤吉・中津・黒田の5村が合併した際に、大善寺玉垂宮に因んで名付けられた。大善寺は、高良玉垂命・八幡大神・住吉大神を祭神とする玉垂宮の神宮寺であり、あわせて御船山大善寺玉垂宮と称した。大善寺勾当職の吉山清満が、慶長9年(1604)にまとめた家譜「吉山旧記」によると、その起源は白鳳元(672)年、法相宗の僧安泰が建立した御船山高法寺に始まるという。そして、延暦14(795)年には天台宗に改宗している。弘仁5(814)年、筑後国三池郡司師直の命により僧房四十五坊・社領三千町となった。その際、堂社に善を尽し華美を尽したので、大善寺と改称したと伝える。事実、境内やその周辺から出土した古瓦には、竹状模骨痕のある無段式の丸瓦や老司式軒平瓦など、白鳳から奈良期に遡るものが見られる。これら大善寺遺跡出土の竹状模骨痕のある丸瓦や正格子文叩き目の平瓦については、広川南岸丘陵上にある八女市の牛焼谷窯跡で焼成されたものと特徴が一致し、十数km離れた同窯跡から郡を超えて供給されていたことが判明している(註5)。

このように大善寺が興隆を極めた背景には、筑後川～有明海と繋がる広川の水運を利用して早くから開けた土地柄が挙げられる。律令期の付近一帯は筑後国三潞郡として『和名抄』に記載され、郡内には高家・田家・三潞・鳥養・夜開・青木・荒木・管綜の8郷の名が見える。うち、荒木町一帯が「荒木郷」、梅満町鳥飼一帯が「鳥養郷」、三潞町高三潞一帯が「三潞郷」、大川市青木一帯が「青木郷」に属していたと考えられている。

一方、大善寺玉垂宮の西、広川北岸沿いの低台地上に御供田遺跡がある。ここでは、8世紀前半～9世紀前半頃にかけての集落が発見されている。この集落は、3間×2間の側柱建物と総柱建物がセットになっており、井戸や廃棄土坑を伴う。特徴的なのは、竪穴住居が一切存在しないことである。また井戸や溝から獣骨が頻繁に出土することがある。更に、井戸内から斎串も検出しており、当時の集落での精神生活の一端が伺われる。奈良時代前半頃より掘立柱建物で構成される同様の集落は、浅い谷を挟んで北側に広がる伽藍田遺跡・夫婦塚遺跡や、川の南東側に立地する旗原遺跡など広範囲に存在している。また、道蔵遺跡と谷を挟み南側に隣接する蓮輪遺跡からは、掘立柱建物のほか8世紀末～9世紀初頭頃の青銅製丸鞆が出土しており、郡衙に出仕する官人層の集落であった可能性が考えられる。旗原遺跡以外の集落遺跡は、大善寺町夜明とは広川を挟んだ対岸に位置するが、一帯は「夜開(やけ)郷」に含まれる可能性もある。なお、夜明にある印鑰神社境内には、良吏として名高い筑後国守(兼肥後国守)道君首名の墓と伝えられる乙名塚がひっそりと佇んでいる。

さて、郷を統括し、徴税業務等の行政を司ったのが郡衙である。道蔵遺跡の東側に隣接する夫婦塚



遺跡では、総柱建物や、3間×6間以上の大形掘立柱建物などを多数検出している。計画方位からも3期以上の変遷が読みとれる。詳細な時期は現地点では不明であるが、周辺の集落における総柱建物より大形であること、道蔵遺跡の隣接地であること、柱筋を揃えて建設された例もあることなどから、郡衙に関連した官衙関連施設である可能性もあるだろう。

また、平成20年度に調査を実施した古賀遺跡では、昭和20～30年代の市営住宅造成の際に、炭化米や土器が出土したと伝えられる。また、玉垂宮との位置関係から『御船山社官屋敷古図』に描かれる「軍司（郡司）長者」との関連も注目される。後述するように、第2次調査では奈良時代の溝も検出された。あるいは、郡衙正倉等の施設の存在も想定されようか。

次に、天神免遺跡では、5間×2間の身舎の四面に庇が取り付く掘立柱建物と、5間×2間の掘立柱建物がL字形に配置された状況が見られる。その他、L字形に並ぶ建物群や、四面庇建物・井戸などが存在し、都合3時期以上の変遷が考えられる。出土遺物に、緑釉陶器・越州窯系青磁等も見られることや、建物の規模・建物配置・敷地規模・倉庫群を伴わないことなどの理由から、8～10世紀頃の有力者の居宅である可能性が考えられる。

市指定史跡・野瀬塚遺跡（安武町）からは、8世紀中頃～9世紀中頃にかけての48棟にも及ぶ掘立柱建物・井戸・土坑などが検出されている。掘立柱建物は、計画方位・配置状況・重複関係から大きく4時期に分けられる。それらは、計画方位を真北かそれに近い方位に統一し、柱筋や距離を揃え、ほぼ半町四方の範囲内に造営される。また、主体となるのは14間×2間、7間×3間といった規模が大形の南北棟建物である。ただし、柱掘形は全て円形で方形掘形が見られず、区画施設が認められないといった特徴も認められる。注目すべきは、出土遺物の豊富さで、二彩陶器・製塩土器・土錘・鉄鏃・刀子・フイゴ羽口に加えて、墨書土器「三万大領」「三万少」「□領」「□主」や刻書土器「田主」、陶硯・転用硯等が出土している。以上の調査成果を受け、郡衙工房とその管理施設との説（註6）や、郷家もしくは郡衙の出先機関とする見解（註7）が出されている。土器に書かれた墨書の内容が、三潯の郡名や郡司の官職名など道蔵遺跡と共通するものが多く、両遺跡の関係が興味深い。

註)

1. 加藤栄編『史料とはなし・郷土大善寺』大善寺文化財保存会。
2. 明治9年（1876）、中島村と荊津村とが合併して中津村と称した。現大善寺町中津。
3. 中山平次郎 1917「銅鉾銅剣発見地の遺物追加」『考古学雑誌』8－10。
4. 矢野一貞『筑後将士軍談』〔原著：嘉永6年（1853）〕
5. 片岡宏二 2004「筑後における奈良時代以前の古瓦」『福岡大学考古学論集』
6. 松村一良 1991「西海道の官衙と集落」『新版古代の日本』3、九州・沖縄、角川書店
7. 富永直樹 1994「野瀬塚遺跡」『久留米市史』第12巻、資料編考古

---

## Ⅲ. 第1次調査

### 1) 調査の目的と経過

当地は大正2～5年にかけて実施された耕地整理の際に地下げを受け、昭和20～30年代の市営住宅造成の際には、多数の土器や炭化米が出土したと伝えられている。また、大善寺玉垂宮との位置関係、および現在も残る「古賀」という字名から、江戸時代に描かれた「御船山社官屋敷古図」に書き込まれた「古賀軍司長者建立尊」との関連が指摘されてきた。立地についても、上津荒木川に面する低台地上に位置し、かつ遺跡南西部で上津荒木川が広川と合流するなど、筑後川から有明海へと繋がり水上交通にも至便な土地である。広川を下れば約400m下流で白鳳期の創建と伝えられる大善寺（現大善寺玉垂宮の地）に達し、約1.5km下流で道蔵遺跡に至り広川に面した両遺跡との連携も容易な場所である。

このような炭化米・軍司（＝郡司）長者伝説・立地などは、道蔵遺跡や野瀬塚遺跡では未だ発見に至っていない郡衙正倉の存在を想起させるに十分であった。ところが、当地一帯は戦後の造成以来開発が及ばず、考古学的情報が未だ少ない状況である。そこで今回、本遺跡の実態解明を目指して、土地所有者である久留米市都市建設部の許可と協力の下、比較的広い面積を有する市営住宅跡地を皮切りに発掘調査を実施する運びとなった。

なお、所在地は久留米市大善寺町宮本字東古賀907、913-1である。調査は平成20年11月26日に開始し平成21年3月19日に終了した。調査面積は528㎡である。

### 2) 調査の概要

調査に当たっては、重要遺跡確認調査という事業の性格上、遺構の保存を大前提に平面での確認を主眼とする調査を実施せねばならないが、遺跡の実態が不明であるため今回は可能な限り掘り下げを行った。また、排土置き場の確保が必要なため、対象地内に東西トレンチを5ヶ所設定し、遺構が希薄な北西部と南部に置き場を設定して、必要に応じて調査区を拡張することにした。結果的には、南西側を拡張したため、調査を二度に分け一度反転している。最終的な調査区の形状は、幅約12m×長さ約26mの東側調査区と幅約11m×長さ約20mの西側調査区が南北に10m前後ずれて接する、クランク状となった。なお、発掘作業終了後は、掘り下げた遺構内に真砂土を充填し、ピットや土坑などの小規模な遺構については突き棒や人力で、またトレンチ内や遺構面に関しては、プレートや人力によって入念に転圧をかけながら埋め戻した。そして最終的には、重機により埋め戻して更地に戻した。

現地調査の経過を、日誌を元に抄録すると次のようになる。まず、平成20年11月26日、対象地に約1m幅の東西トレンチを5ヶ所設定し、遺構の粗密を観察する。敷地南側の2ヶ所では遺構がほとんど見られない。28日、重機による掘削作業と併行して作業員を投入、テント設置後、土嚢作成・

壁切り作業などを行う。12月2日、ユンボによる表土掘削作業終了、遺構検出作業を開始する。11日、西側調査区西辺部で甕棺の断面らしき輪郭が見える。同様の覆土を有する土坑も2基ほど確認。遺構掘り下げ作業を開始する。16～26日、専用住宅建設の事前調査として急遽浮上した第2次調査を優先する。平成21年1月9日、現場作業始め。排水作業を行い、遺構掘り下げを続行。14日、トータルステーションによる測量を開始する。16日、1回目の空中写真撮影。2月2日、埋め戻しのための真砂土搬入、人力による遺構の埋め戻し作業を開始する。12日、重機により西側調査区南側の拡張作業。午後より、遺構検出作業を実施する。18日、文化庁調査官、筑後国府跡調査指導員の先生方が来訪。3月2日、甕棺墓の個別実測図（1/10）を作成開始。13日、雨のため現場中止。24時間の降水量、久留米のアメダスで40mm。16日、排水作業の後、機材の片付け。ユンボによる埋め戻し。19日、機材撤収、対象地を再封鎖し現地作業を終了する。

### 3) 検出遺構

対象地の層序は、客土（50cm）、耕作土（約10cm）直下で、黄褐色の地山土が広がっており、遺構検出はこの面で実施した。

調査の結果、弥生時代前期末頃の土壇墓・ピット、同中期前半～後期初頭頃の甕棺墓、古墳～奈良時代の柱穴（竪穴住居の可能性あり）、中世の溝2条、土坑1基を検出している。

以下では、主要な遺構について記述する。

#### a. 甕棺墓

**S T 10**（図4・図版5） 西側調査区西辺中央やや北寄りで検出した。S T 70の北東側約3mの位置である。他の甕棺と同様、大正時代の耕地整理の際に削平されたものと思われる、袈裟懸けに切断された状態で下甕のみが検出された。墓壇は楕円形プランで、規模は長軸長86cm、短軸長64cm、深さ18cmである。据えられた甕棺は主軸方位をN-69°-Eにとる。甕は大形成人棺で、約42°の角度で設置されている。

**S T 70**（図4・図版6） 西側調査区西辺中央やや南寄りで下甕と口縁部を打ち欠いた上甕の一部を検出した。S T 10の南西側約3mの位置にある。墓壇は楕円形プランで、規模は長軸長1.1m、短軸長80cm、深さ38cmである。西側はオーバーハング気味に掘り込まれ、ここに下甕底部を差し込み、棺を約41°の傾斜角をつけて設置する。甕は大形成人棺で、口縁部を打ち欠く。その主軸方位は、N-81°-Eである。

**S T 80**（図4・図版7） 西側調査区南西隅で検出した。S T 70から南へ約6mの地点である。墓壇の平面形状は楕円形で、規模は長軸長89cm、短軸長65cm、最大深36cmである。断面形状は西側から階段状に低くなり、甕底部が挿入されていたと思われる最深部はオーバーハング気味に掘り込まれる。墓壇の主軸方位はN-66°30'-Wくらいであろう。甕棺は、胴部が一部残るのみである。これは、墓壇に後世の掘り込み痕跡があり、残存する甕片もこの攪乱坑の形状に沿って欠失していることから、人為的に抜き取られたものと考えられる。





Y=-48370

X=+30760

Y=-48360

Y=-48350



图3 第1次調査区平面図 (1/100)

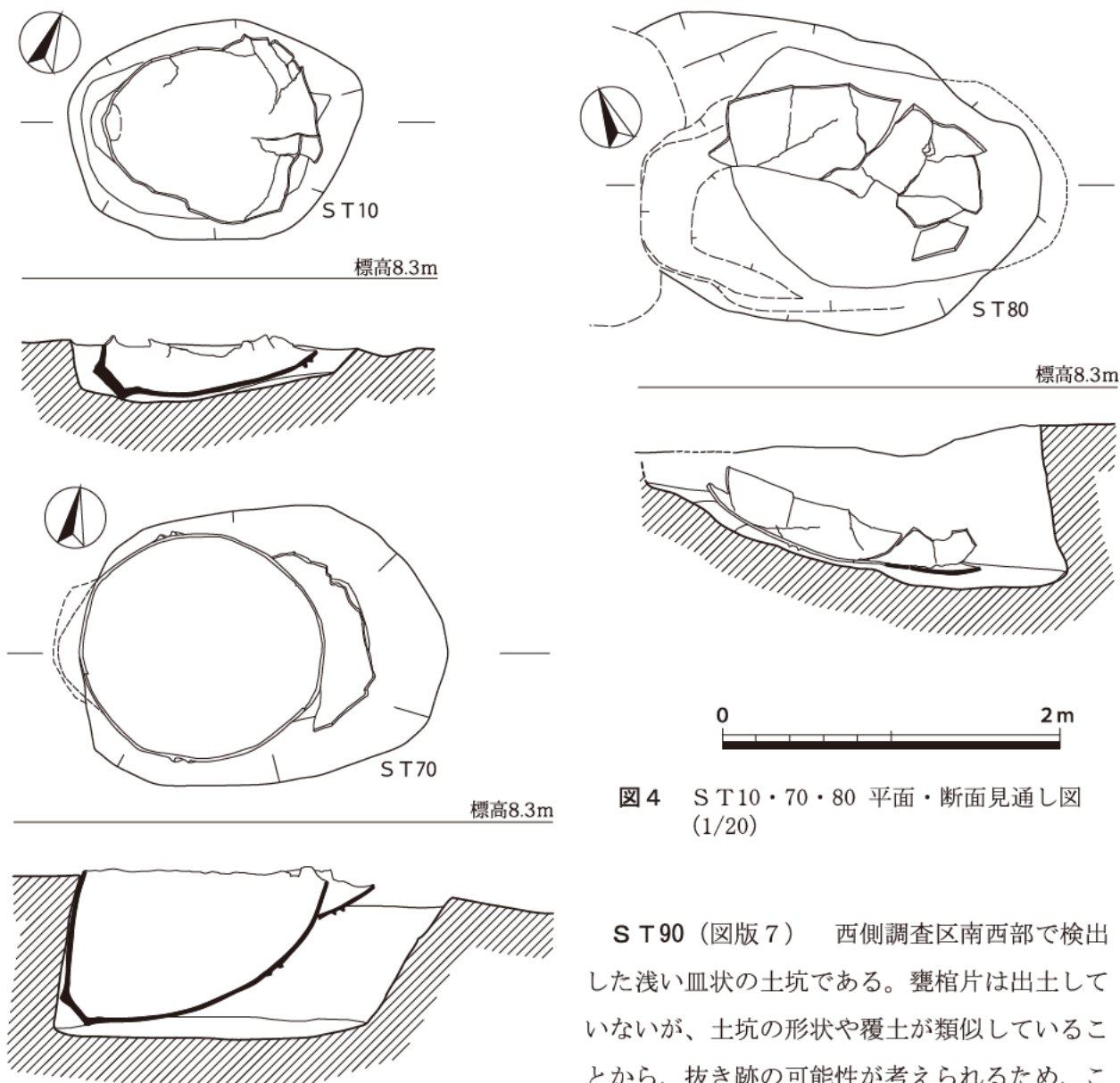


図4 ST10・70・80 平面・断面見通し図  
(1/20)

**ST90** (図版7) 西側調査区南西部で検出した浅い皿状の土坑である。甕棺片は出土していないが、土坑の形状や覆土が類似していることから、抜き跡の可能性が考えられるため、ここでは甕棺墓とした。

#### b. 土壌墓

**ST20** (図5・図版8) 調査区中央付近で検出した。平面形状は長方形で、長さ1.72m、幅53cm、深さ31cmを測る。墓壇の主軸方位はN-45° 30' -Wである。墓壇内の覆土は自然堆積土ではなく、淡茶褐色土にブロック土が混入する。底面はフラットである。木棺などの痕跡が見いだせなかったことから、土壌墓と判定した。副葬品はないが、口縁部に刻目凸帯を施す甕片が出土しており、弥生時代前期末頃の時期に比定される。

**ST30** (図5・図版8) 調査区中央付近で検出した。ST20の北東1.5mに位置する。平面形状は隅丸長方形で、長さ1.03m、幅67cm、深さ27cmを測る。底面はフラットである。墓壇の主軸方位はN-22° 30' -Eである。覆土はST20と類似しており、形状なども考慮して同時期の土壌墓と判断したが、覆土中に土師器小片が1点出土しており注意を要する。

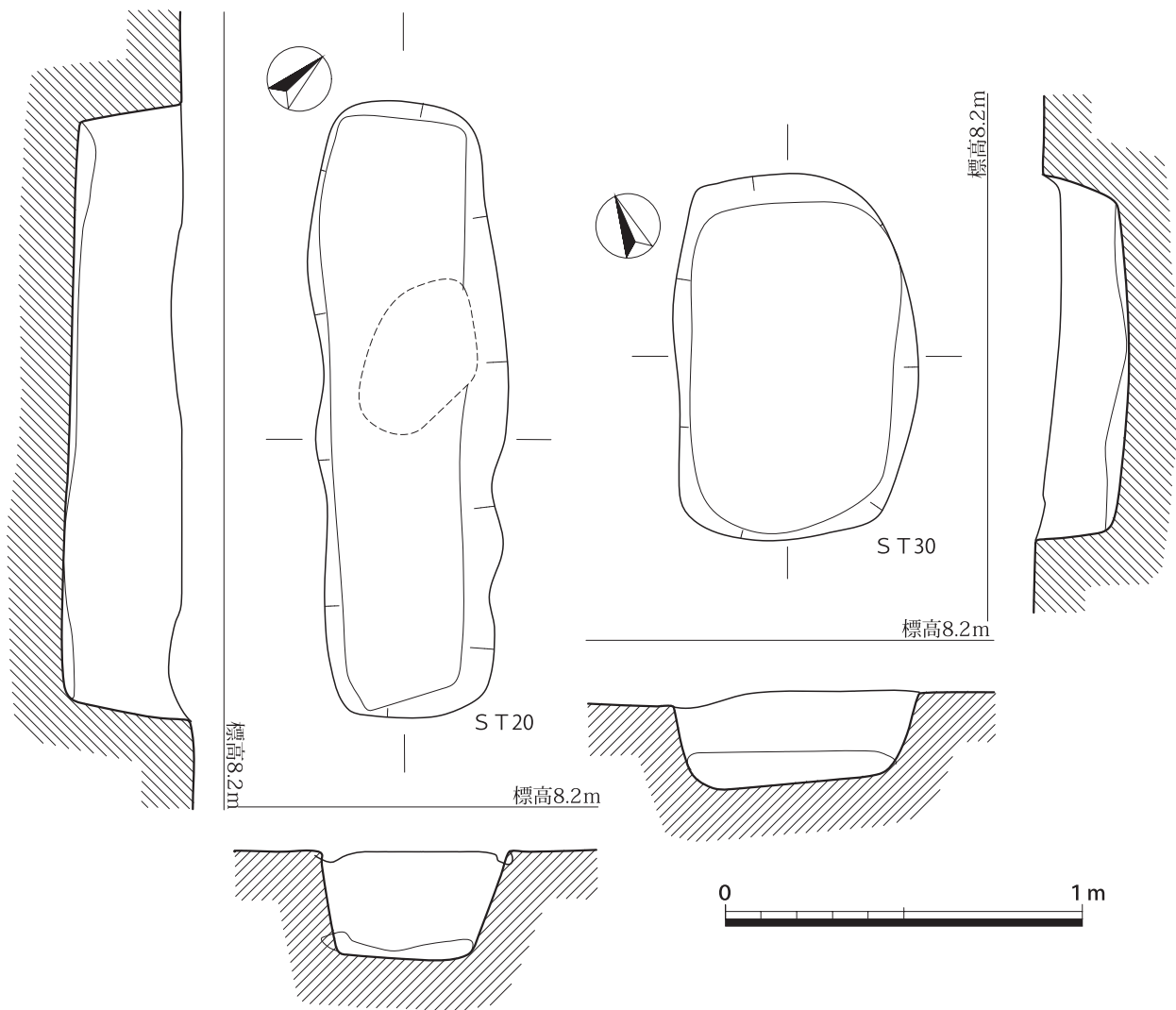


図5 ST20・30 平面・断面見通し図 (1/20)

### c. 竪穴住居

**S I 100** (図6) 西側調査区中央部で検出した。1間×1間の規模の掘立柱建物として検出したが、その規模や周辺状況などから、壁と床面が削平された竪穴住居とした方が妥当ではないかと判断した。柱間は南北3.1m、東西2.8mである。柱穴プランは略円形で、直径は45～70cm、深さ34～45cmを測る。出土遺物としては、柱穴から弥生土器小片2点と黒曜石剥片1点が出土したのみである。4本柱という構造から考えれば、弥生時代終末期以降、奈良時代頃までの時期が想定されるが特定は困難である。

### d. 土坑

**S K 60** (図7、図版9) 東側調査区北端部で検出した。その規模は、長さ1.7m、最大幅89cm、深さ8cmである。平面形状は不定形であるが、残存する深さから考慮すると、削平により土坑の底部のみが残ったのであろう。出土遺物には、土師器・須恵器の他、青磁碗や常滑焼の大甕片などがある。中でも竹状模骨痕の残る古瓦片は、混入品ながら注目される。



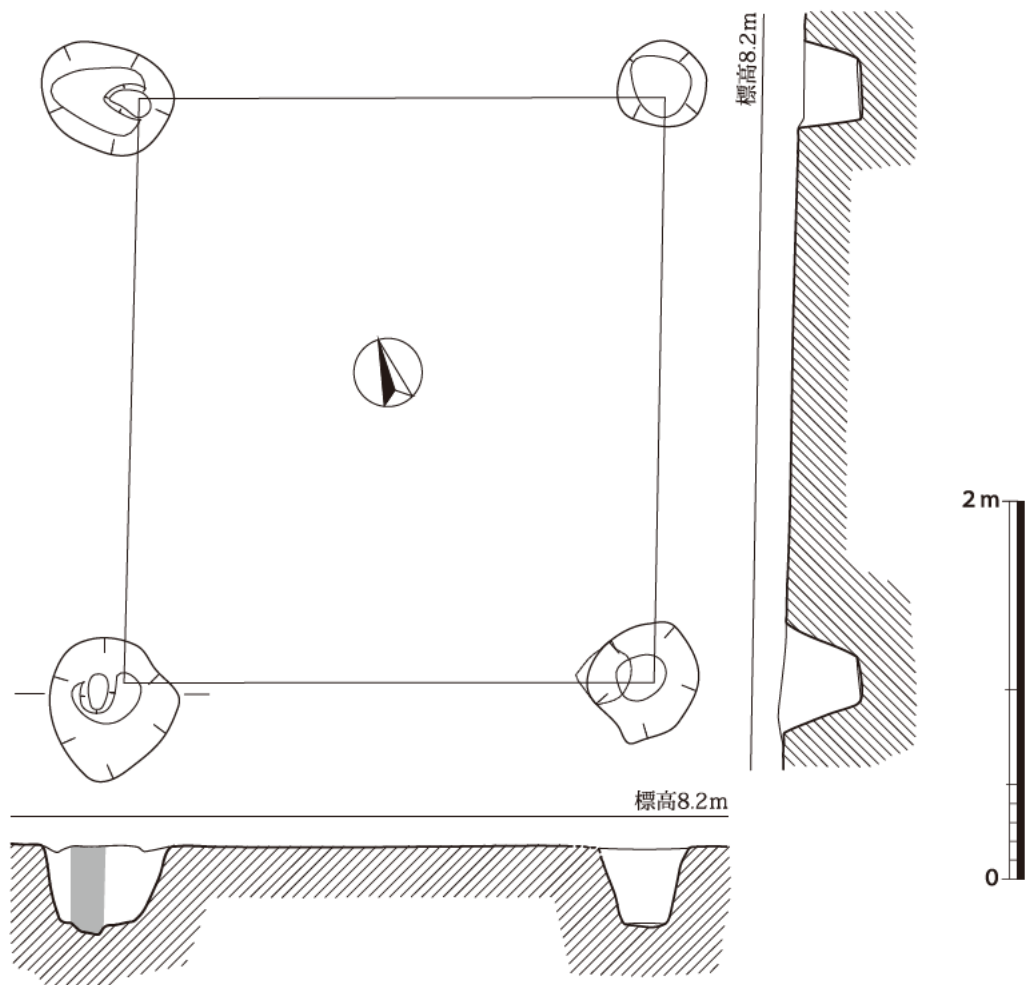


図6 S I 100 平面・断面見通し図 (1/40)

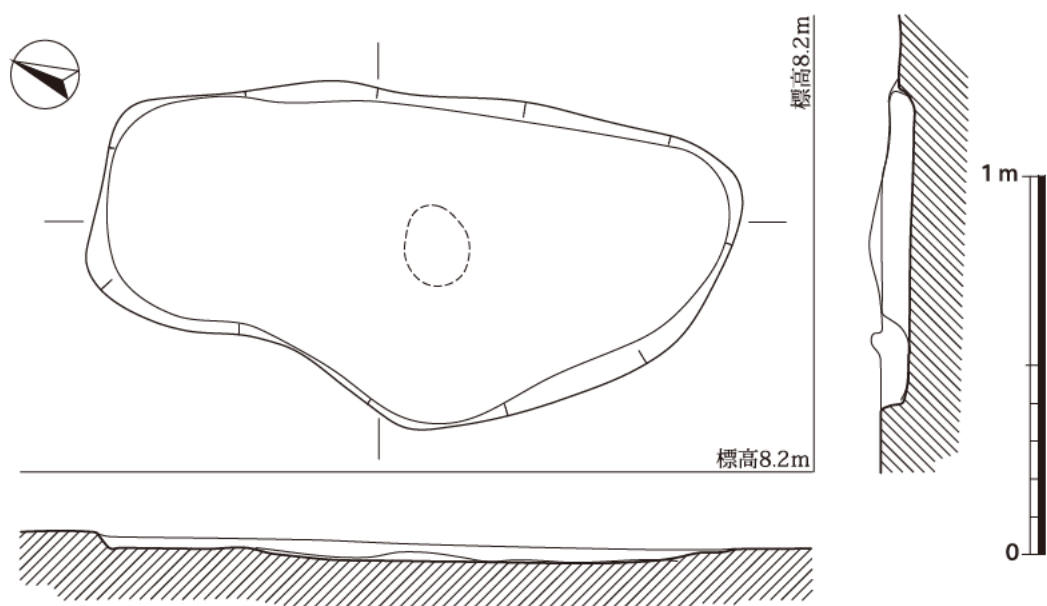


図7 S K 60 平面・断面見通し図 (1/20)

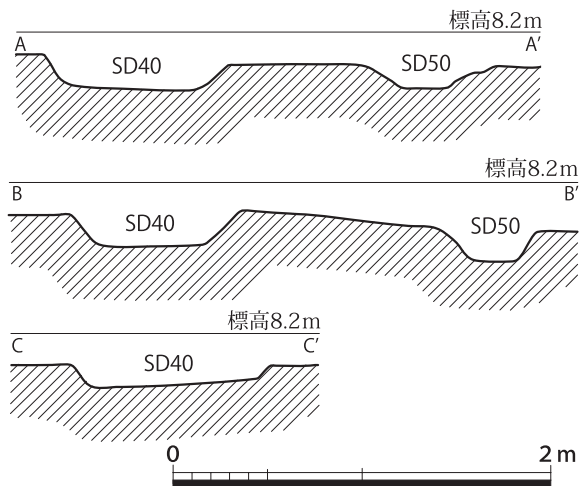


図8 SD40・50 断面図 (1/40)

おり、時期的には室町時代に比定される。

**SD50 (図8)** 東側調査区を北西側から南東側に向かって、SD40の東側をやや弧を描きながら並行して走行する溝である。調査区内では長さ約6.7m分を検出した。北側は調査区外へ延びている。幅、深さ共に一定ではないが、最大幅は約70cm、深さ15cmを測る。出土遺物には、土師器・須恵器がある。切り合い関係からSK60より後出し、時期的にはSD40とほぼ同じ頃の所産であろうと考えられる。

#### 4) 出土遺物

大正時代の耕地整理で削平されたために遺構の残りが悪く、かつ密度も低いため出土遺物はパンコンテナ5箱程度であり、調査面積が広い割には出土遺物が少ない。また出土遺物の大半は甕棺片が占める。この他、量的にはわずかだが、弥生土器・石器、土師器、須恵器、古瓦、貿易陶磁器、国産陶器などが出土した。時期的には弥生時代前期末～後期、古墳時代、飛鳥時代、鎌倉時代、室町時代にまたがっている。

##### a. 甕棺墓 (図9、ST90のみ図10)

**ST10 1**は大形成人棺の下甕で、口縁部が欠失している。法量は、底径11.8～12.0cm、器高は53cm以上である。胴部には2条の凸帯を廻らす。器面には、不明瞭だが縦方向のハケメを施す。胎土には1mm大の礫と角閃石を含む。

**ST70 2**は大形成人棺の上甕で、胴部のみの破片である。法量は、胴部の最大径は72cm程だがもう少し大きくなる可能性もある。胴部には2条の凸帯を廻らす。器面には、不明瞭だが縦方向のハケメを施す。胎土には1mm大の礫と角閃石を大量に含む。**3**は大形成人棺の下甕である。口縁部は埋葬の際に打ち欠きされている。法量は、底径12.0～12.2cm、高さは現状で80.8cm、胴径は70.5cmである。胴部中程より上部に2条の凸帯を貼り付ける。器面には縦方向のハケメが残る。胎土は5mm大以下の礫と角閃石が大量に混入している。

##### e. 溝

**SD40 (図8)** 東側調査区を北西側から南東側に向かってやや弧を描きながら斜行する溝である。長さ約20m分を検出したが、両端部は調査区外へ延びている。東側に並行するSD50とともに低台地の縁辺部に沿って走行しているものと思われる。両溝より東側は一段低くなっている。幅や深さは一定ではないが、最大幅1.05m、深さ約20cmである。底部には薄い砂質土層があり、北から南方へ水流の痕跡が認められる。出土遺物には、土師器・須恵器などの他、明染の皿などが出土して

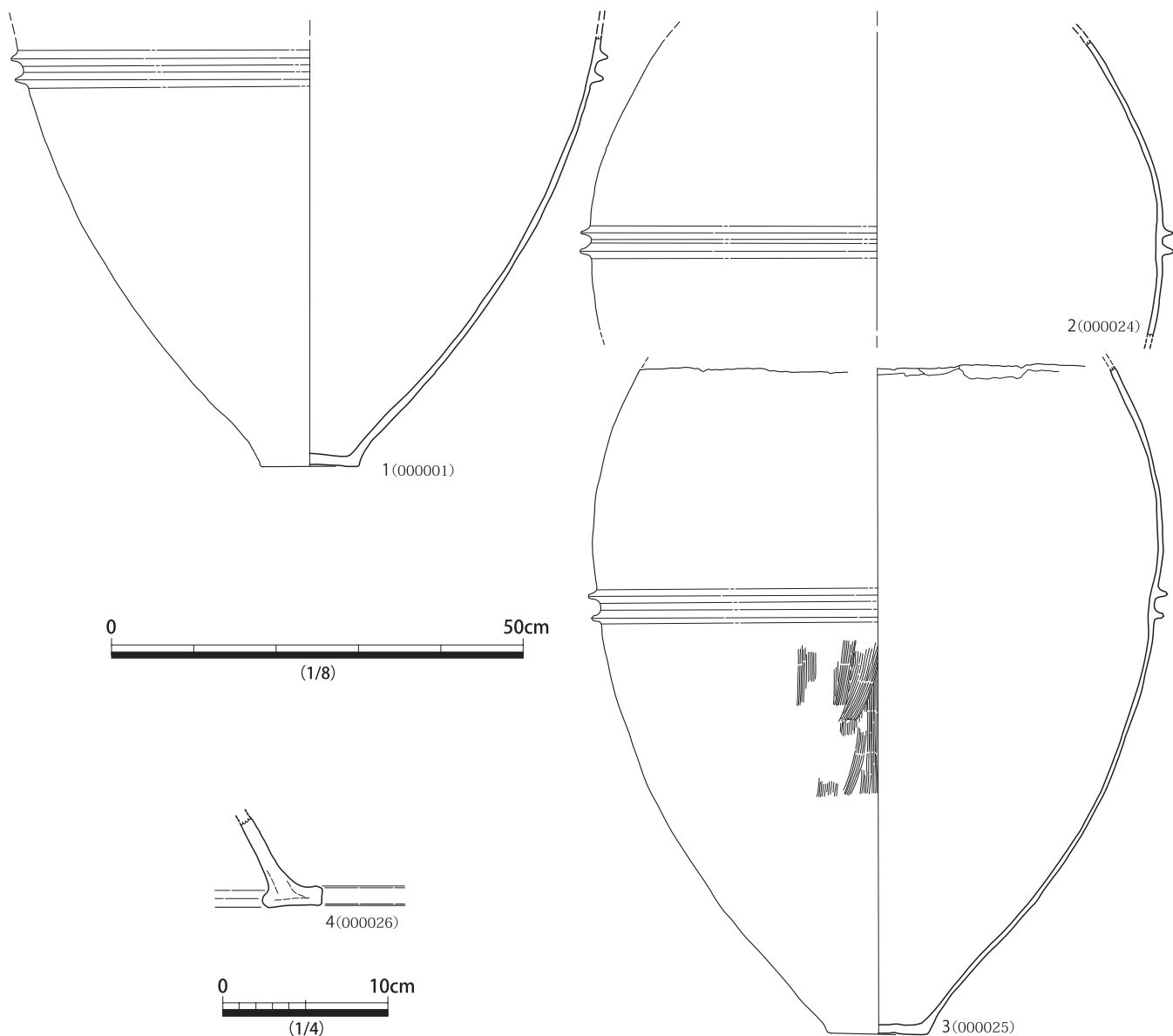


図9 S T 10・70・80 出土遺物実測図 (1/4・1/8)

S T 80 4は大形成人棺の蓋となる鉢の口縁部片である。小片のために法量は不明である。口縁部の断面形状はT字形で、外側に張り出すものの内側への張り出しはわずかである。外面は縦方向のハケメを施した後、ナデ消す。胎土には2mm大以下の礫、角閃石を多く含む。

S T 90 12 (図10) は土師器甕の口縁部片である。外面は2次被熱のため赤変し剥離している。胴部内面はケズリを施す。胎土には2mm大以下の礫と石英を含む。混入品か。

#### b. 土墳墓 (図10)

S T 20 1は弥生土器の甕の口縁部片である。口縁端部よりわずかに下った位置に凸帯を施す。胎土には2mm以下の礫を多く含み、角閃石もわずかに認められる。色調は内外共に橙色である。2は弥生土器の壺の口縁部片である。口縁部はわずかに外反し、端部はやや膨らむ。色調は内外共に橙色である。胎土やや細砂粒を含むものの精良である。



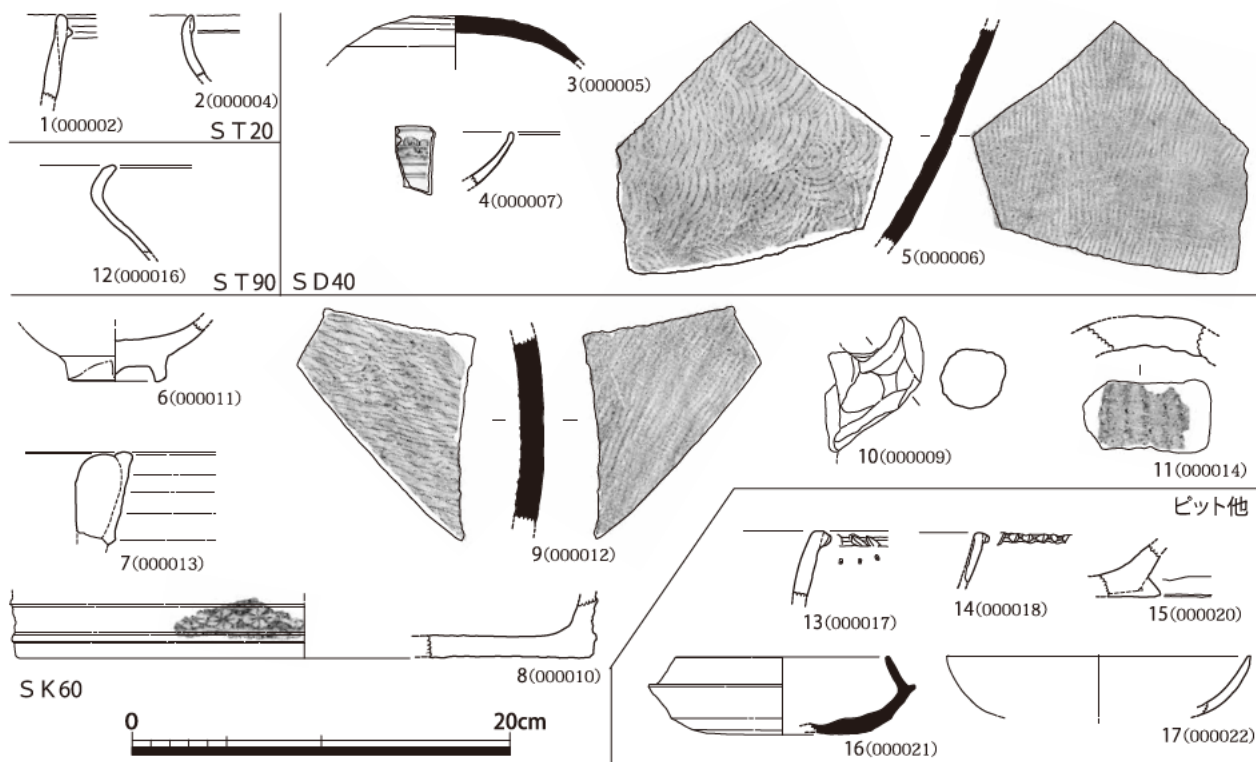


図10 ST 20・SD 40・SK 60・ST 90 ピット出土遺物実測図 (1/4)

### c. 土坑 (図10)

**SK 60** 6は青磁碗である。釉薬は灰オリーブ色を呈し、高台の一部と高台内部は露胎、見込み部は釉薬を掻き取る。7は常滑焼大甕の口縁部片である。外面は釉が飛んでおり色調は灰色、内面は灰褐色である。4mm大以下の礫を大量に含む。8は土師質の火鉢の底部片である。内面は二次被熱で橙色を呈する。外面最下部には円周方向に四ッ菱のスタンプが連続して施され、底部にはムシロ状の圧痕が見られる。9は須恵器甕である。外面は細かい正格子文叩き、内面は平行文+青海波文の当て具痕が残る。10は土師器甕の取っ手である。11は丸瓦片である。ローリングを受けて器面は荒れているが、凹面に竹状模骨痕が認められる。凸面の調整は不明である。焼成は不良で色調は白色に近い灰白色である。胎土には石英など、5mm以下の礫が多く含まれ荒い印象である。

### d. 溝 (図10)

**SD 40** 3は須恵器の坏蓋の天井部である。外面には回転ヘラ削りを施す。4は明染の皿である。5は須恵器甕胴部片で、外面は平行文叩き、内面には青海波文当て具痕が残る。

### e. ピット他 (図10)

13はSP 8出土の弥生土器甕で、口縁部には刻目凸帯文をめぐらせ、その下部には刺突文を施す。14はSP 9出土の弥生土器甕で口縁部には刻目凸帯文を施す。15はSP 11出土の弥生土器甕の底部である。16はSX 29出土の須恵器坏である。外底部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデで成形する。17は出土遺構は不明だが土師器の椀である。

---

## IV. 第2次調査

### 1) 調査に至る経過

調査の発端は、平成20年11月27日付で、地権者より専用住宅建設に先立ち、久留米市大善寺町宮本902-22における埋蔵文化財の有無についての照会がなされたことによる。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である古賀遺跡の範囲に含まれ、道路を隔てた北東隣接地では折しも前日より第1次調査を開始していた。旧建物は既に撤去されており、ただちに試掘調査を実施した結果、表土直下に遺構面が確認されたため、事前に発掘調査が必要であるとの旨を地権者側へ回答した。その後の協議で、第1次調査と併行して調査を実施する運びとなった。

所在地は久留米市大善寺町宮本字東古賀902-22、現地調査は平成20年12月16日に開始し、同月26日に終了した。対象面積は111㎡で、そのうち調査面積は32㎡である。

### 2) 調査の概要

対象地は旧市営住宅地内にあり、第1次調査地の南東約25mの地点にあたる。住宅地内は平らに造成されているが低台地の東辺部にあたり、敷地より東側の水田面は一段低くなっている。表土直下は遺構面となっており、表土掘削に伴う廃土は少ないものと予想されたが、対象地は狭く隣家建物が迫り、かつ敷地に隣接する電柱の位置などから、敷地内での表土掘削用重機の行動範囲が限定され、わずか32㎡の調査となった。

現地調査の経過を、日誌を元に抄録すると次のようになる。まず、平成20年12月16日、ユンボによる表土剥ぎを実施。土嚢作成、遺構検出作業を行う。翌17日、甕棺と南北溝を掘り下げる。甕棺は削平が著しく下甕のみ。溝内にも甕棺片が多数混入している。トータルステーションによる測量作業を開始。18日、南北溝を掘り下げる。溝内には甕棺片と自然礫（板石）が充満している。南側が一段深くなっており、幅約90cm、深さ約70cm。19日、南北溝完掘。溝覆土は人為的に埋め戻されており、ブロック土と共に甕棺片が投棄されている。同溝の完掘状況・土層などの写真撮影を行う。土層図（1/10）、甕棺平面図（1/10）作成。トータルステーションによる測量を実施。24日、甕棺断面見通し図を作成（1/10）、同棺を取り上げる。取り上げ後、調査区内外を清掃、全体写真を撮影する。25日、真砂土を搬入、人力とプレートを使用しながら転圧を繰り返し、埋め戻し作業を実施する。26日、ユンボによる埋め戻し作業を行い、現地作業を終了する。

遺構写真撮影には、カラーリバーサル6×7、モノクローム6×7のフィルムを使用した。遺跡全体の図面記録は、トータルステーションにより三次元計測してデータを取得し、パソコン上で専用の編集ソフトを用いて編集、図化している。また、土層断面図（1/10）や個別遺構図（1/10）については、水系メッシュ法で作成した。

### 3) 検出遺構

対象地は、上津荒木川に南面する標高約10mの低台地上に立地する。現在は、旧市営住宅跡地が払い下げられ、民間宅地となっている。対象地中央部に設定した調査区は、東西約6m、南北約5.5mで北東コーナーを隅切りした狭い範囲ながらも、表土直下から弥生時代の甕棺墓1基、奈良時代の溝1条を検出した。

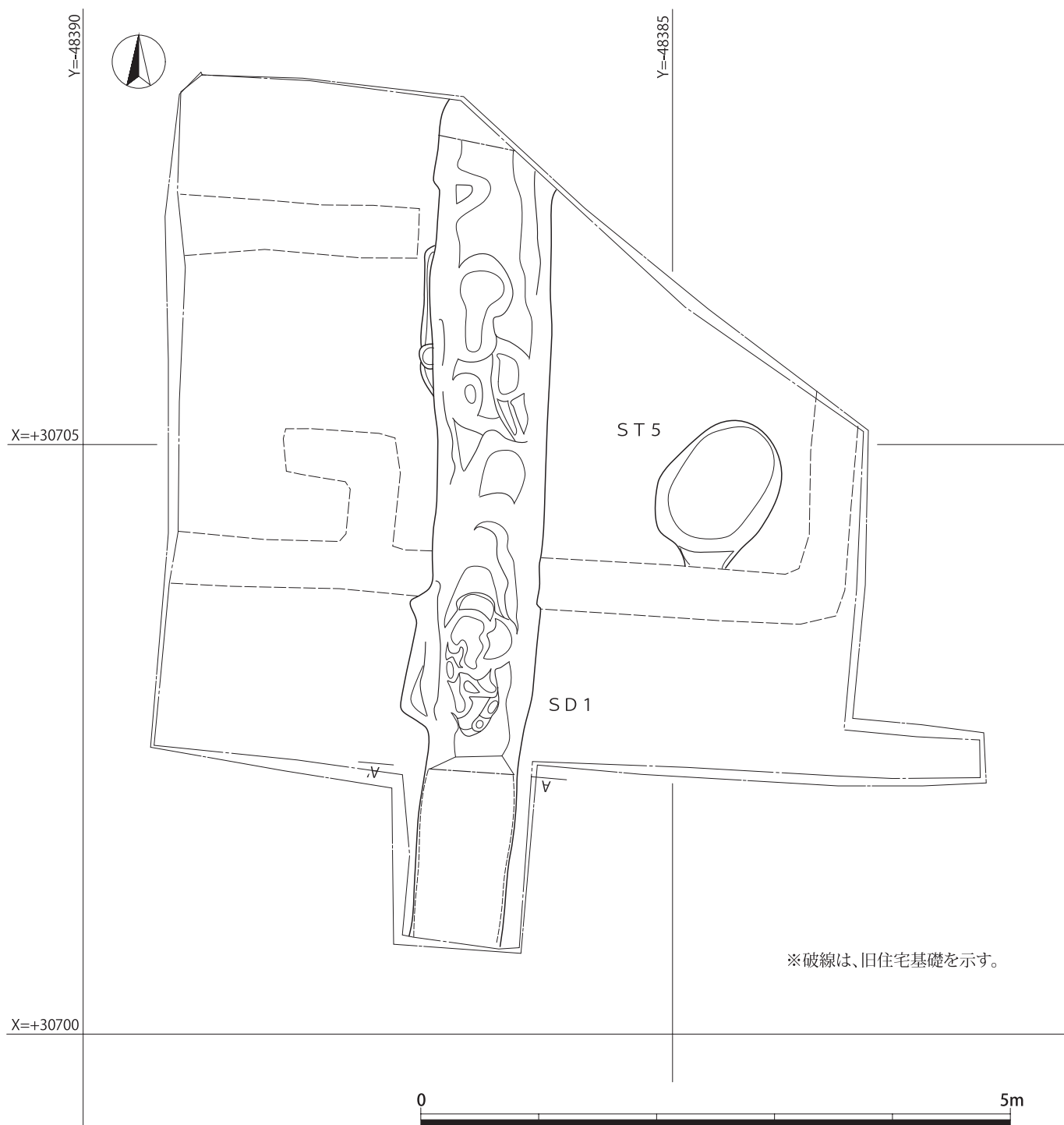


図11 第2次調査区平面図 (1/50)

#### a. 甕棺墓

**ST5** (図12、図版12・13) 調査区東辺中央付近で検出した。検出は表土直下で、下甕が半裁された状態であり、大正時代の耕地整理および、終戦後の市営住宅造成時に大きく削平を受けていることがわかる。墓壙は楕円形プランで、主軸方位をN-42° 30' -Eにとる。規模は長軸1.7m、短軸90cm、深さ31cmである。甕棺は合わせ口の大形成人棺と思われて、墓壙内に約50°の傾斜角度をつけて安置されている。

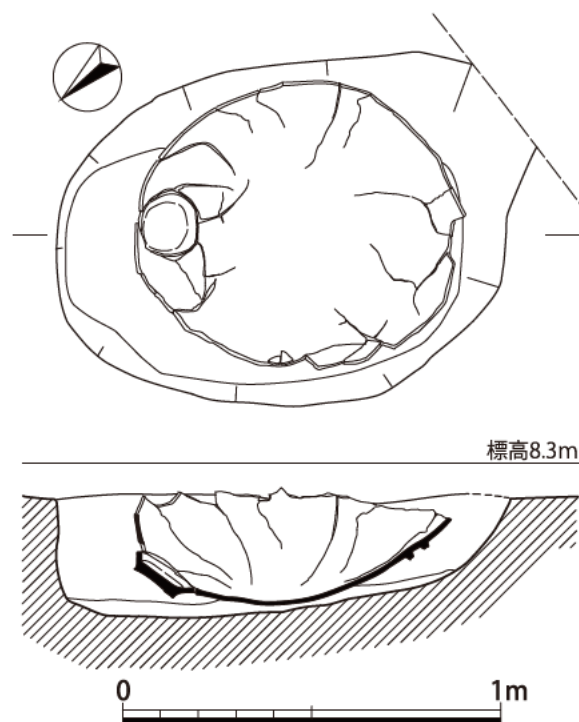


図12 ST5平面・断面見通し図 (1/20)

#### b. 溝

**SD1** (図11・13、図版10～12) 調査区中央部で検出した南北溝である。調査区内で約7m分を確認している。直線的に延びるが、わずかに屈曲している。その主軸方位は、溝北半でN-30' -E、南半ではN-40° 30' -Eである。溝の断面形状は逆台形を呈する。規模は、上端幅78～104cm、深さ約65～70cm、下端幅40～50cmである。覆土は全て人為的埋土で、検出面から約50cmの深さまでは（上層：図13-①～④層）大量の弥生時代の甕棺片、片岩の角礫で充填している。ただ

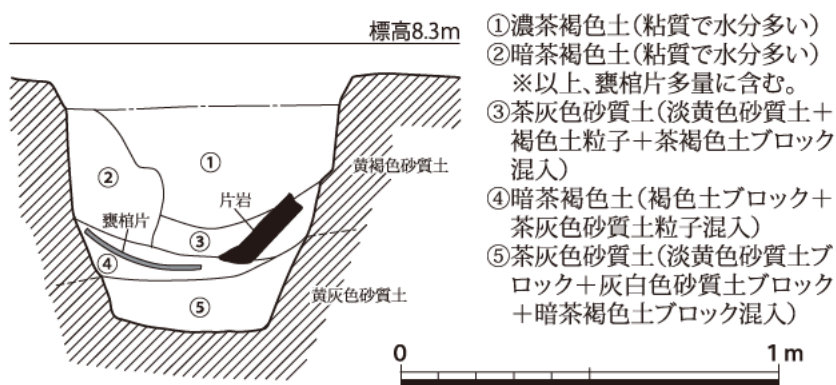


図13 SD1土層断面図 (1/20)

し③層には甕棺片は少ない。この層では地山ブロックが主体となっている。これ以下の20cm程は、濁った色調の砂質土に様々な種類のブロック土が混入する層である（下層：図13-⑤層）出土遺物は少ないが、上層遺物と接合関係にあるものが複数存在するので、両層は一連の工程で埋め戻されたと考えるのが自然であろう。なお、溝底部はフラットではなく長さ1.5～2.5mで連続する凹凸部分が見られるが、基本的に自然堆積物はない。なお、調査区を対象地南側境界付近まで一部拡張したが、対象地外側まで延びていることが判明した。

#### 4) 出土遺物

大量の弥生土器と土師器、須恵器、土製品、黒曜石剥片など、パンコンテナ6箱分が出土した。



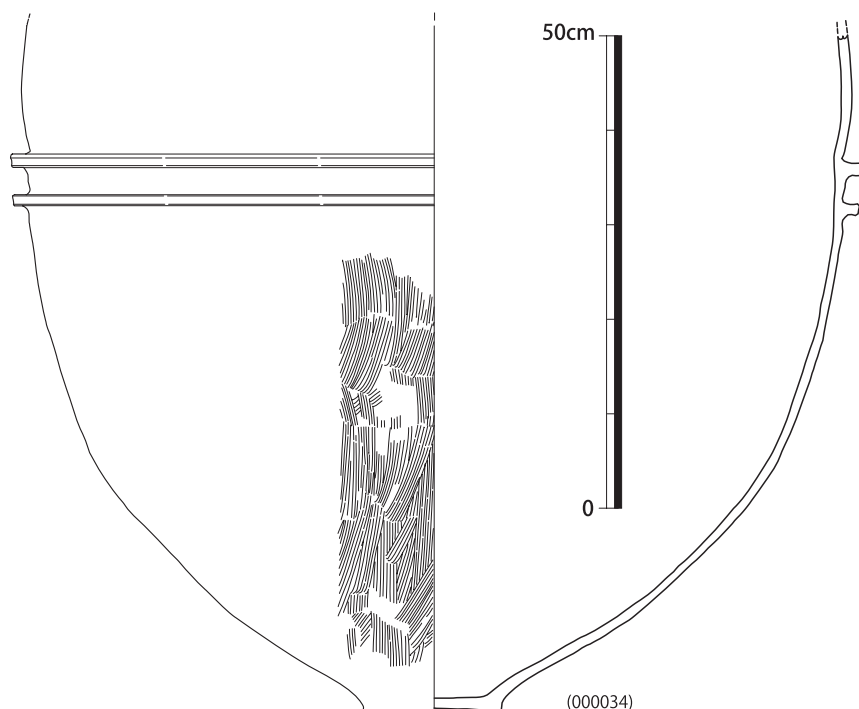


図14 ST 5 下甕実測図 (1/8)

ST 5 から出土した弥生時代の甕棺を除く全てが、溝からの出土であり、調査面積の割には非常に多い遺物出土量といえる。また、SD 1 上層からは甕棺片とともに奈良時代の須恵器蓋やフイゴ羽口片などが出土しており、注目される。同溝出土遺物の甕棺以外の構成は、土師器供膳具片 3 点、同煮沸具片 2 点、須恵器供膳具片 4 点、フイゴ羽口片 1 点、黒曜石剥片 1 点となっている。

a. 甕棺墓 (図14)

**ST 5** 大形成人棺の下甕で、口縁部が欠失している。法量は、胴部最大径90cm、底径14.4～14.6cm、器高は71cm以上である。胴部にはシャープな2条の断面コの字形凸帯を廻らす。器面調整は、縦方向のハケメで仕上げる。色調は外面が橙色で、内面は橙色から灰白色を呈し、焼成も良好である。胎土には1mm大の礫と少量の赤色粒子を含む。

b. 溝 (図15・16)

**SD 1** 1～7は、全て成人用大形甕棺である。ほとんどが甕であるが6のみは鉢であり、蓋として使用したものと思われる。1は甕の口縁部片である。法量は、口径66cm、高さ13cm以上で、口縁部の形状はT字形である。ただし、内側には張り出すものの外側への張り出しは弱い。口縁下はすばまらず、全体のシルエットは砲弾型の形状であったと思われる。胎土には3mm大以下の礫と角閃石を多く含む。2は甕の口縁部片である。法量は口径64.8cm、高さ23cm以上である。口縁部の形状はT字形で、内側には張り出すが外側への張り出しは弱い。口縁部下はややすぼまる。胎土は1mm大以下の礫、角閃石、赤色粒子を含む。3は甕の口縁部から胴部にかけて残存する。法量は口径69.0cm、高さ60cm以上である。口縁部の形状はT字形で外側への張り出しもやや発達している。口縁部下はすばまらず、全体は砲弾型のシルエットを呈する。胴部下半に断面M字形の凸帯を1条めぐらす。胎土には1mm大の礫と角閃石を多く含む。4は甕の口縁部から肩部にかけての破片である。法量は口径49～50cm、高さ35cm以上である。口縁部の形状は外側への張り出しが発達したT字形であったと思われるが、内側への張り出しは打ち欠かれ、鋤先状となっている。口縁部下は大きくす

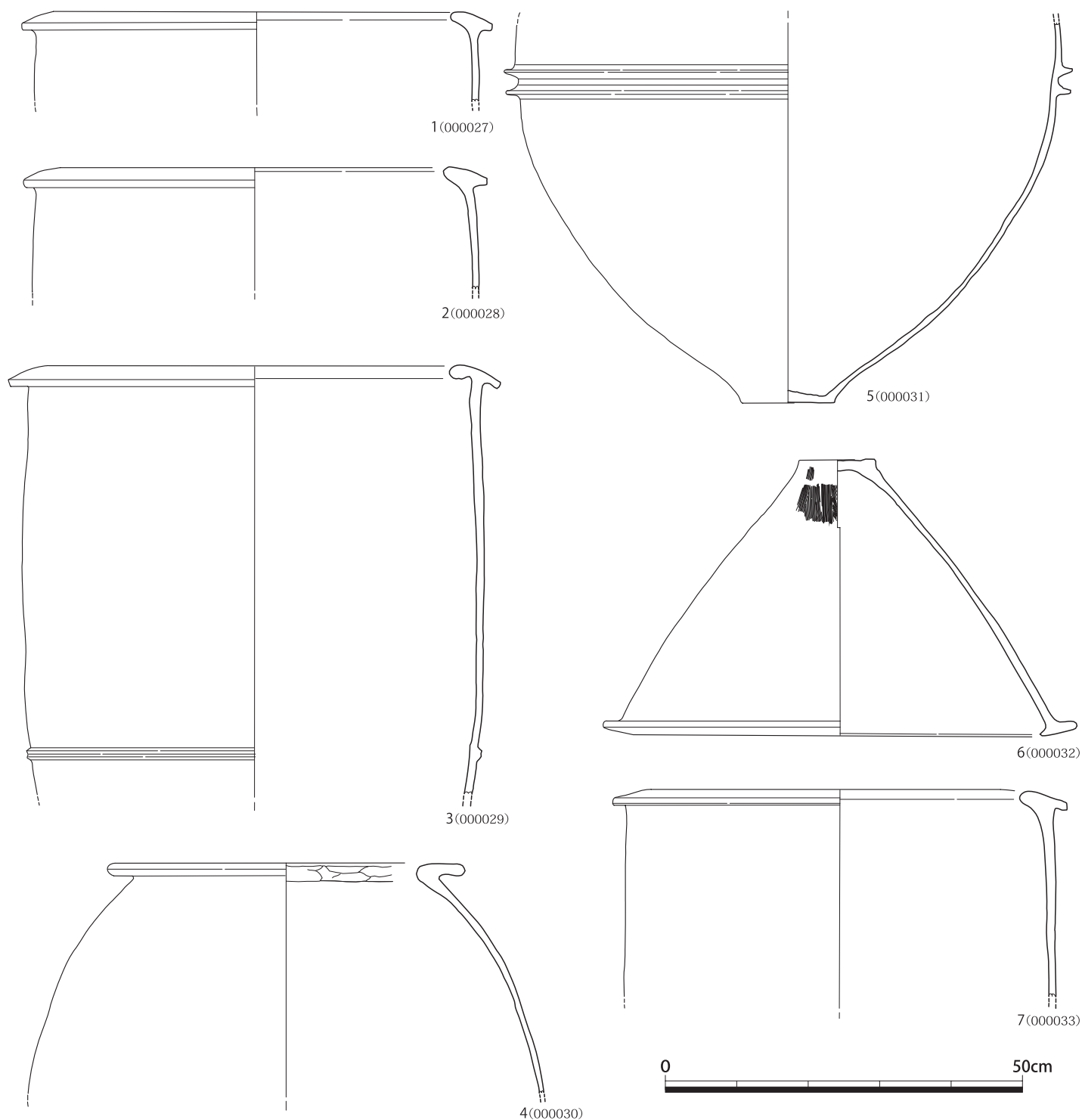


図15 SD 1 出土遺物実測図① (1/8)

ぼまり胴部最大径は甕の中程になろうかと想定される。胎土には3mm大の礫が多く含まれるが、肉眼観察では石英が主体と認められる。5は甕の胴部から底部にかけての破片である。法量は底径13.0cm、胴部最大径80cm、器高53.0cm以上である。胴部には細い2条の凸帯を貼り付ける。胎土には3mm大の礫が多く含まれ、肉眼観察ではそのほとんどが石英である。6はほぼ完形に復元できる

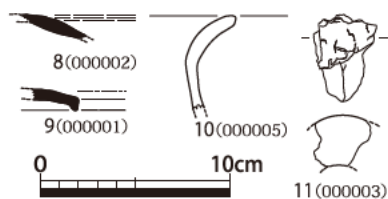


図16 SD 1 出土遺物実測  
図② (1/4)

蓋である。法量は底径10.7cm、口縁部径66.5cm、器高38.7cmである。口縁部の形状はT字形で、外側に向けて傾斜し、外側には張り出すものの内側への張り出しは弱い。外面は縦方向のハケメで調整される。胎土には1mm大以下の礫、角閃石、炭化物粒子、赤色粒子などを含む。7は下層から出土した甕の口縁部片である。法量は口径63.8cm、器高29.0cm以上である。口縁部の形状はT字形で、内側には張り出すものの外側へのそれは発達しない。8は須恵器の蓋の天井部片である。天井部外面はヘラ削りで調整される。色調は灰白で、1mm大の礫を含む。9は須恵器蓋の口縁部片である。内外面とも回転ナデ調整され、口縁先端部の断面形状は小さく緩い三角形を呈する。胎土には4mm大の礫がわずかに含まれる。10は土師器甕の口縁部片である。体部内面は縦方向のヘラ削りで仕上げられる。胎土には1mm大の礫と角閃石が少量含まれる。11はフイゴ羽口の先端部の小片である。外面は二次被熱で黒変しガラス状の物質が付着する。内面も二次的に熱を受け赤変している。



①大善寺玉垂宮 ②参毛郡司(三池軍司)宿所 ③古賀軍司長者建立尊  
図17 「絹本着色玉垂宮縁起」(左)と「御船山社宮屋敷図」(右)

---

## V. 結 語

**弥生時代の墓地について** 甕棺墓は、第1次調査地では3基と抜き跡の可能性のあるもの1基、第2次調査では1基と、溝に投棄された甕棺10個体以上と石蓋に用いられた可能性もある片岩片が確認された。また、第1次調査地では、前期末に遡る土壇墓群が存在し、甕棺墓に先行する形で墓域を形成していた状況が明らかとなった。すなわち、当地における弥生時代の墓域形成は、弥生時代前期末に開始され同後期初頭頃まで続いていたものと考えられる。

また、第1次調査地の東隣接地は、一段低い休耕田となっているが、ここからはかつて甕棺墓が出土している。昭和49年（1974）に光山利雄氏が記した埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、昭和29年（1954）、同水田を地下げ工事中に石蓋甕棺墓を確認したという。カード裏面の遺跡略図には、同水田中に単棺の石蓋甕棺墓のイラストが2基描かれている。2基の主軸は東西方向であり、西側に石蓋を施し南北に並列している。

大正時代の耕地整理で、二重周溝を有したとされる銚子塚古墳をはじめ、東側の荒木町から西側の大善寺町に至る間の「イロハ塚」と称された古墳群が壊滅的なまでに破壊され消滅している。今回の調査でも、地下深く埋葬された甕棺墓の下甕の一部のみ残るものがほとんどであったことから見て、当時相当な削平を受けたことは想像に難くない。しかし、東側の旧市営住宅跡地の地下には、残りは悪くとも弥生時代の墓地が眠っていると考えられる。

**郡衙関連の遺構と遺物について** 第2次調査で検出された南北溝SD1は、主軸方位を真北方向から30°～45°東に振る。深さの割に幅が狭く、断面は逆台形で直線的に延びている。溝壁面は直線的ではなくやや膨らんだ形状を呈しており、同溝完工後時間が経過する中での自然崩壊の進行を示しているものと思われる。しかし溝底部には堆積物が確認できないことから、その除去など日常的にメンテナンスが施されていたものと思われる。このような状況から、何らかの区画溝、もしくは排水溝としての機能が想定される。

溝の廃絶段階では、覆土中には弥生時代の甕棺片が大量に投棄される。これらは上層と下層出土のものが接合関係にあるなど、同一工程で埋め戻された状況が想定される。また、これらに混じってわずかではあるが、8世紀後半代の須恵器やフイゴ羽口片が含まれ、同溝の下限がそれ以降であることを示す。一方、第1次調査で検出したST80は、攪乱され甕棺が抜き取られていた。抜き取り坑には、新しい土が混入しないことから、大正時代の耕地整理に伴うものではなく、より古い時代の抜き取りであろうと考えられる。恐らく8世紀以降、付近一帯では土木工事の必要性があつて溝が掘削され、その後、施設改築などの際、作業に支障をきたす甕棺を抜き取り、破碎し同溝に投棄して埋め戻したのと考えてよいのではないかと。なお、1978年に調査地点西側で水道管が敷設された際、2条の南北溝が確認されたという。詳細は不明だが、低台地中央側すなわち調査地西側一帯へ関連遺構が広がっている可能性を示唆している。



一方、注目される遺物もある。鎌倉時代の土坑への混入品ではあるが、凹面に竹状模骨痕のある瓦片である。これは無段式丸瓦（行基瓦）の一部と思われるが、胎土や焼成、色調などの特徴から、広川上流の八女市牛焼谷窯跡で焼成されたと考えられる。同製品は、旧上妻郡の八女郡広川町正恵大坪遺跡、三潞郡の大善寺遺跡（大善寺玉垂宮境内）など、旧郡域を超えた広川流域の7世紀後半以降の官衙・寺院関連遺跡に供給されている。

さらには、炭化米の出土を伝える点も重要である。炭化米は全国の官衙関連遺跡から出土することが多い。これは奈良時代後期から平安時代にかけての郡衙正倉において頻繁に発生した火災（「神火」）によるものと考えられている。その可能性も残しているのではないだろうか。

以上のように、古賀遺跡においては、奈良時代前後の土木工事が想定できること、竹状模骨痕のある古瓦が出土することに加え、炭化米の出土が伝えられる点や平安時代の土師器が出土していることなどを勘案すれば、奈良～平安時代にかけて、公的な拠点施設があった可能性は、極めて高いのではないかとと思われるのである。

**絵図等にみえる「軍司長者」について** 図17左は、大善寺玉垂宮の境内と周辺の景観を描いたもので、旧箱書きには室町時代の建徳元年（1370）の製作とある。右は、江戸時代後期頃の境内と坊の位置を描いたものである。ともに玉垂宮正面の川は広川、それに架かる橋は傘橋である。また、後者の右中央には「古賀軍司長者建立尊」という書き込みが認められる。「尊」は尊像自体もしくはそれを安置する社を指すのだろうか。位置関係と地名から現在の古賀遺跡付近に該当しよう。しかしそこは広川右岸であり、上津荒木川右岸に立地する現況とは異なっている。実は現在の上津荒木川流路は、人工的に変更されたものである。大正2～3年（1913～1914）にかけて、蛇行著しく頻繁に氾濫を繰り返す広川との合流地点付近の流れを改善すべく、字古賀・東古賀の南側に放水路を掘削したのである。それ以前の流路は、明治33年（1900）陸地測量部地図（1/2万）に見られるように、古賀遺跡北側を迂回していた。現状は谷地形となっており、旧河道を示す「古道」という字名が残っている。すなわち、大正時代以前は広川右岸に面することとなり、絵図の状況とも合う。なお絵図では、その左手に広川と合流する小河川が描かれている。玉垂宮の坊の右手に沿って右上（北東）側へ延びていることから、旧上津荒木川ではなく、字柳蓮輪の谷地を流れる小河川を表現している可能性があるだろう。

さて、旧勾当職吉山家の家譜「吉山旧記」によれば、大善寺玉垂宮は白鳳元年（672）に建立され、延暦14年（795）には天台宗に改宗、弘仁5年（814）三池郡司師直が全面改築したと伝える。そして、平安時代末からは三潞庄の鎮守社となった。この記事から、玉垂宮の造営に際して三池郡司と呼ばれる地元有力者が関与したことが想像される。この伝承を踏まえたものか、図17の2幅とも、右下に「参毛郡司（三池軍司）宿所」が描かれる。玉垂宮を造営し、古賀に尊像もしくは社を建立した軍司の館の表現であろう。「朝日寺縁起」には、「郡司」の子孫と思われる三潞庄在住で三池長者と呼ばれた藤吉種継が登場する。以上から玉垂宮とも関係が深く、「郡司」「長者」伝説が残る古賀遺跡については、今後ともその実態解明を進めなければならないと思う。

## 写真図版





(1) 古賀遺跡遠景①（南上空から）※赤線は、第1次調査地点



(2) 古賀遺跡遠景②（南西上空から）※赤線は、第1次調査地点



## 図版 2



(1) 古賀遺跡遠景③（南東上空から）※赤線は、第1次調査地点



(2) 古賀遺跡遠景④（東上空から）※赤線は、第1次調査地点





(1) 第1次調査区上空から広川方面を臨む（北東から）



(2) 第1次調査区上空から大善寺玉垂宮方面を臨む（東上空から）



## 図版 4



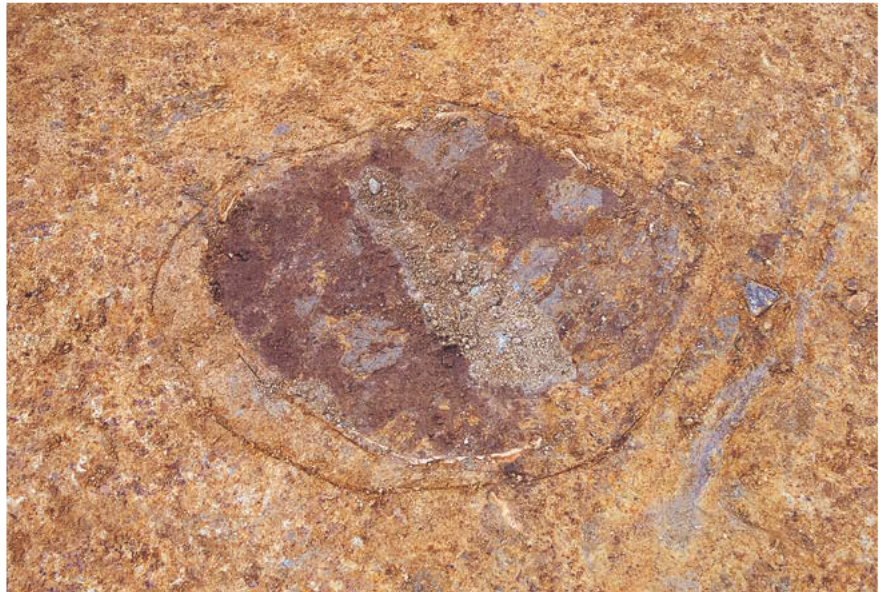
(1) 第1次調査区北半部（北上空から）



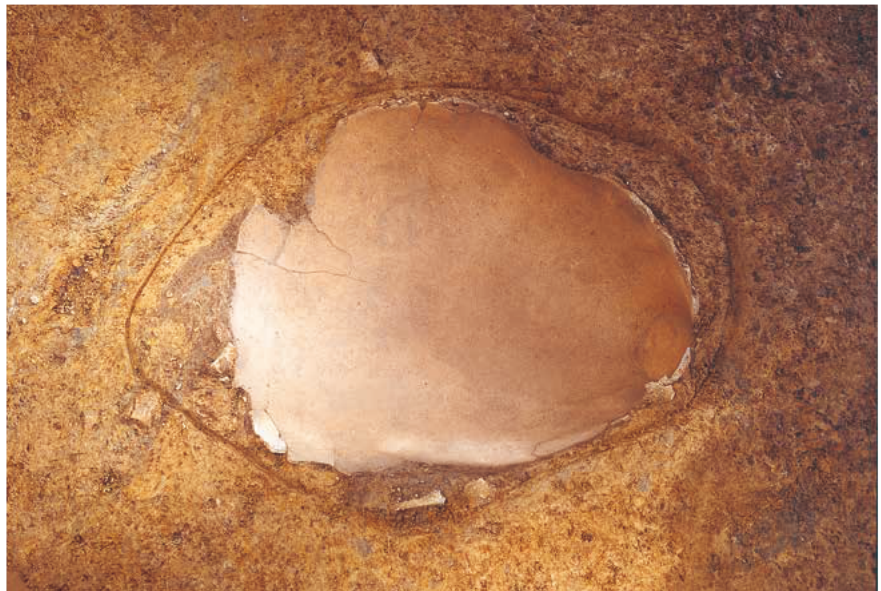
(2) 第1次調査区南半部（東から）



(1) S T 10検出状況  
(南東から)



(2) S T 10甕棺出土状況  
(北西から)



(3) S T 10完掘状況  
(南東から)





## 図版 6



(1) S T 70検出状況  
(南東から)



(2) S T 70甕棺出土状況  
(南東から)



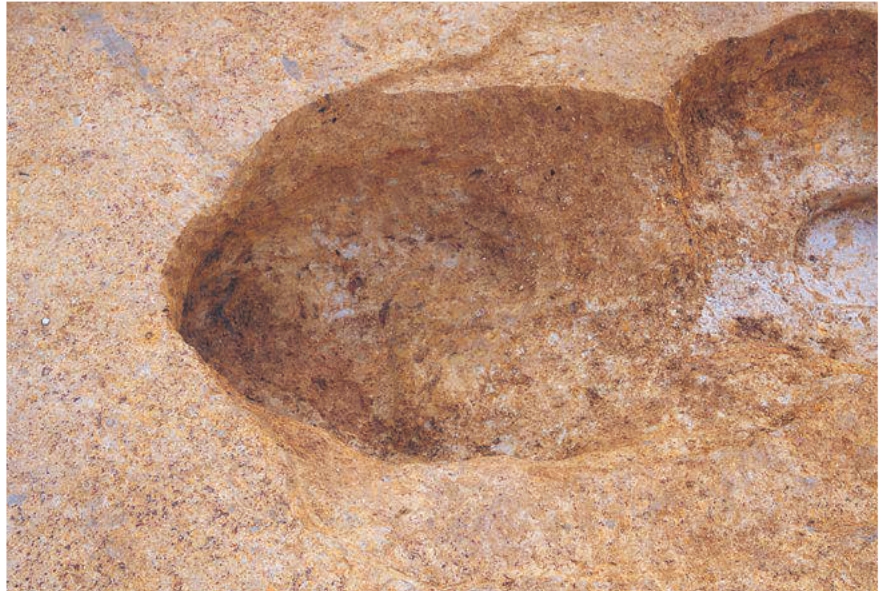
(3) S T 70完掘状況  
(北西から)



(1) S T 80 甕棺出土状況  
(北から)



(2) S T 80 完掘状況  
(北西から)



(3) S T 90 完掘状況  
(南から)





## 図版 8



(1) S T 20完掘状況  
(北東から)



(2) S T 30完掘状況  
(南東から)



(3) S K 60遺物出土状況  
(北西から)

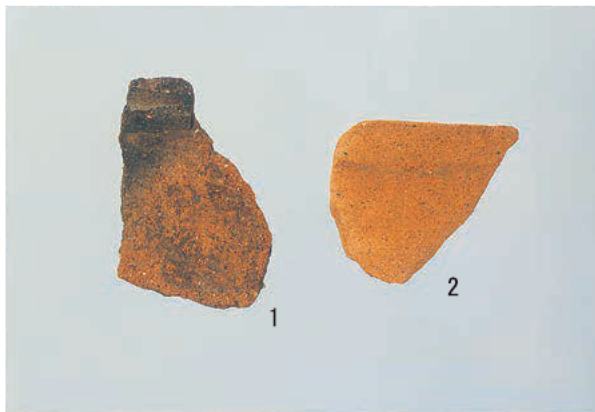




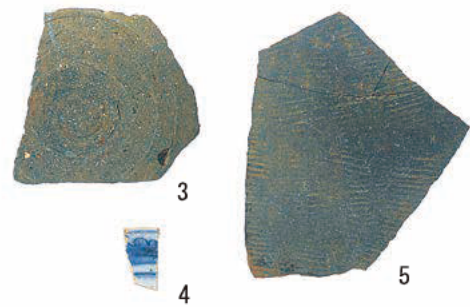
(1) S T 10下甕



(2) S T 70下甕



(3) S T 20出土土器



(4) S D 40出土土器



(5) S K 60出土土器



(6) ピット等出土土器



## 図版10



(1) 第2次調査区全景（北から）



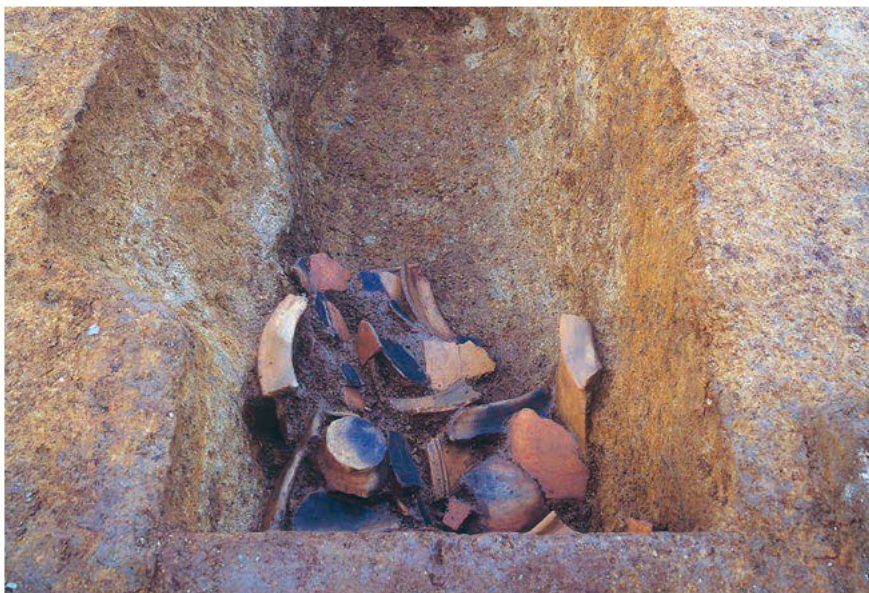
(2) S D 1 北半部上層遺物出土状況（北から）



(1) S D 1 北半部上層遺物  
出土状況（南から）



(2) S D 1 南半部上層遺物  
出土状況（南から）



(3) S D 1 土層堆積状況  
（北から）





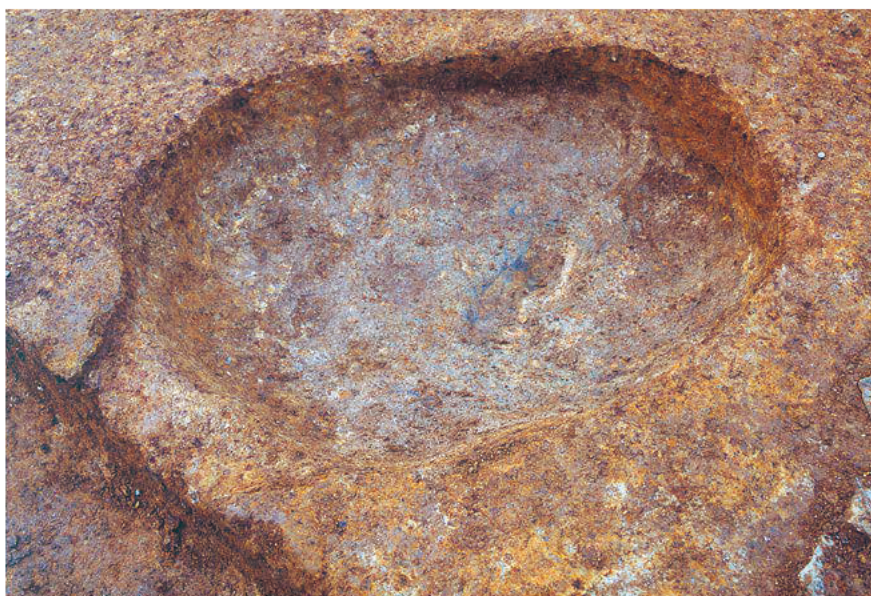
## 図版12



(1) S D 1 完掘状況  
(南東から)



(2) S T 5 甕棺出土状況  
(南東から)



(3) S T 5 完掘状況  
(南東から)





(1) S T 5 下甕



(2) S D 1 出土遺物①



(3) S D 1 出土遺物②



(4) S D 1 出土遺物③



(5) S D 1 出土遺物④



(6) S D 1 出土遺物⑤

# 報告書抄録

|       |                                                               |  |  |  |  |  |  |
|-------|---------------------------------------------------------------|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな  | ちくごくみずまぐんがあとろく                                                |  |  |  |  |  |  |
| 書名    | 筑後国三潞郡衙跡Ⅵ                                                     |  |  |  |  |  |  |
| 副書名   | -古賀遺跡 第1・2次調査-                                                |  |  |  |  |  |  |
| シリーズ名 | 久留米市文化財調査報告書 第305集                                            |  |  |  |  |  |  |
| 編著者名  | 小澤太郎                                                          |  |  |  |  |  |  |
| 編集機関  | 久留米市役所 文化観光部 文化財保護課                                           |  |  |  |  |  |  |
| 所在地   | 〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL. 0942-30-9225 FAX. 0942-30-9718 |  |  |  |  |  |  |
| 発行年月日 | 平成23(2011)年3月31日                                              |  |  |  |  |  |  |

| ふりがな<br>所収遺跡名                       | ふりがな<br>所在地                                | コード   |        | 北緯                | 東経                 | 発掘期間                      | 発掘面積 | 発掘の原因        |
|-------------------------------------|--------------------------------------------|-------|--------|-------------------|--------------------|---------------------------|------|--------------|
|                                     |                                            | 市町村   | 遺跡番号   | ° ' "             | ° ' "              |                           |      |              |
| こが いせき<br>古賀遺跡<br>だいじ ちょうさ<br>第1次調査 | 福岡県久留米市<br>大善寺町宮本<br>あざひがしこが<br>字東古賀 907ほか | 40203 | 030762 | 33°<br>16'<br>34" | 130°<br>28'<br>51" | 20081126<br>～<br>20090319 | 438㎡ | 重要遺跡<br>確認調査 |

| 所収遺跡名         | 種別       | 時代             | 主な遺構                                        | 主な遺物                                  | 特記事項                                                                                                                 |
|---------------|----------|----------------|---------------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 古賀遺跡<br>第1次調査 | 墓地<br>集落 | 弥生<br>鎌倉<br>室町 | 甕棺 4基<br>土壇墓 2基<br>竪穴住居 1軒<br>溝 2条<br>土坑 1基 | 弥生土器・石器・土師器・須<br>恵器・古瓦・国産陶器・貿易<br>陶磁器 | 炭化米出土伝承地の東側を調査。官<br>衙関連遺構については、検出できな<br>かったが、弥生時代の墓地が広がっ<br>ていたことが確認された。遺物には<br>竹状模骨痕のある古瓦が出土し、近<br>辺に公的施設の存在が想定される。 |

## 要約

終戦後の市営住宅造成の際、当調査地の西側で炭化米が出土したと伝わる。また、大善寺玉垂宮との位置関係から、縁起に描かれた「古賀軍司長者屋敷」の比定地となっている。今回は、上津荒木川に面した低台地上の東端部において、面的な調査を実施したが、これらに関連する遺構は検出されなかった。しかし、出土遺物には八女市牛焼谷窯跡産の可能性のある古瓦が見られた。この瓦は、広川流域の官衙関連遺跡や寺院などで出土しており、近辺に公的施設が存在する可能性がある。一方、弥生時代前期末～後期にかけての甕棺墓や土壇墓を検出しており、この台地上が弥生時代の墓地であったことが判明した。

|          |   |          |                          |
|----------|---|----------|--------------------------|
| 土木工事の届出日 | - | 遺物の発見届出日 | 20文財第1246号<br>平成21年3月23日 |
|----------|---|----------|--------------------------|

| ふりがな<br>所収遺跡名                       | ふりがな<br>所在地                                 | コード   |        | 北緯                | 東経                 | 発掘期間                      | 発掘面積 | 発掘の原因      |
|-------------------------------------|---------------------------------------------|-------|--------|-------------------|--------------------|---------------------------|------|------------|
|                                     |                                             | 市町村   | 遺跡番号   | ° ' "             | ° ' "              |                           |      |            |
| こが いせき<br>古賀遺跡<br>だいじ ちょうさ<br>第2次調査 | 福岡県久留米市<br>大善寺町宮本<br>あざひがしこが<br>字東古賀 902-22 | 40203 | 030762 | 33°<br>16'<br>33" | 130°<br>28'<br>50" | 20081216<br>～<br>20081226 | 32㎡  | 専用住宅<br>建設 |

| 所収遺跡名         | 種別       | 時代       | 主な遺構          | 主な遺物                   | 特記事項                                |
|---------------|----------|----------|---------------|------------------------|-------------------------------------|
| 古賀遺跡<br>第2次調査 | 墓地<br>官衙 | 弥生<br>奈良 | 甕棺 1基<br>溝 1条 | 弥生土器・土師器・須恵器・<br>黒曜石剥片 | 官衙関連遺跡の区画の可能性ある<br>南北溝を発見。甕棺墓も検出した。 |

## 要約

南北溝は、幅90cm、深さ70cmで断面形状は逆台形を呈し、掘削後維持管理されていたが、最終的には人為的に埋め戻されている。埋土中からは大量の甕棺片が出土し、埋め戻しの際に近辺の甕棺墓が相当数破壊されたものと思われる。埋土中からは甕棺に混じって、8世紀代の須恵器数点が出土しており奈良時代の溝と考えられる。その規模や方向性から、官衙関連遺跡の区画溝である可能性がある。

|          |            |          |                          |
|----------|------------|----------|--------------------------|
| 土木工事の届出日 | 平成20年12月9日 | 遺物の発見届出日 | 20文財第950号<br>平成20年12月26日 |
|----------|------------|----------|--------------------------|



## 筑後国三猪郡衙跡 VI

-古賀遺跡 第1・2次調査-

---

久留米市文化財調査報告書 第305集  
平成23(2011)年3月31日 発行  
発行：久留米市教育委員会  
編集：久留米市役所文化観光部文化財保護課  
印刷：中村印刷有限会社

---

